

わが家に来る万の神さま



たじりとみよ

わたしは39歳で再婚のため3人の娘を連れてアメリカのど真ん中のカンザスに移住してきました。

それから5年後、幸せに暮らしていたわたしの目に異常が現れ出し、とても珍しい遺伝性の病気で、網膜色素変性症（Bietti's Crystalline Retinopathy）という治療薬もない難病とわかり、将来は失明すると診断されました。

その後再婚相手が病気で亡くなり、途方に暮れているとき、和紙にいやされ、救われました。

地球環境にもよく、人にもよい、こんなすばらしい和紙をアメリカの人にもわけてあげたいと思い、和紙や折り紙でアートクラフトの小物をつくり、売る商売を始めました。

現在、わたしは70パーセント失明しており、見える範囲が狭まってくるなか、家族や友人にわたしの将来について心配させたくないと思い、何とか失明しても楽しく生き生きと暮らしていける術を見いだしています。

自分の視力が落ちてくる経験を活かして、目の不自由な方でも触って楽しめるアートを紹介しています。見える方にも触っていただき、自分が今見えていることはすばらしいことなんだと気づいていただきたい、その気づきの機会をつくってさしあげることがわたしの使命だと思っています。

美術館やイベント会場、自宅で折り紙を教えながら、日本の和の心も伝えていきたいと、着物を着けて活動を続けています。

今回の東日本大震災の被災地の方々のことを思えば、わたしに降りかかる難事は比べものになりませんが、何とか苦難をうまく乗り越えていただき、失った大切な方のためにもより意義深く生きていただき、朝に泣き、昼は働き、また夜は泣いても、寝る前には、今日はすばらしい日であったと言っていたいただきたい、そう願っています。

日本は必ずすばらしい国として立ち直ります。わたしはそう信じています。

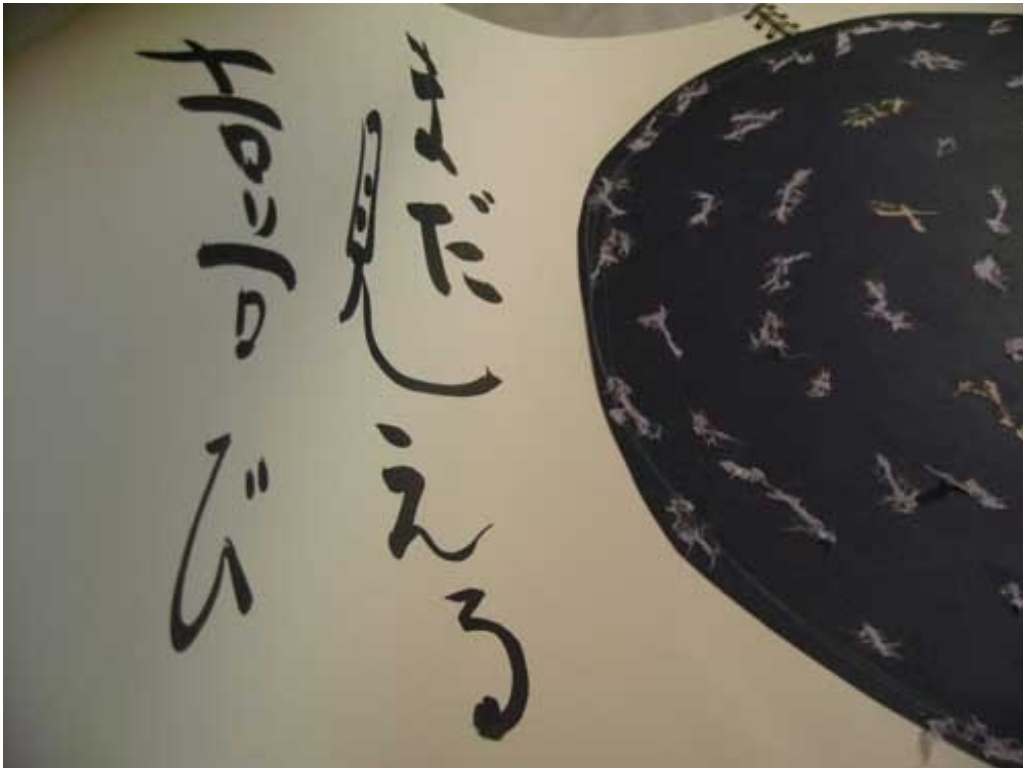
この本を読まれたすべての方が、苦しいことがあってもプラス思考になり、幸せな人生を送っていただけたらこの上ない喜びです。

まだ見える喜び

わたしは毎日幸せ。
なぜなら「愛してます」と言ってくれるあなたの声が聞こえるから。
わたしも「愛してます」とあなたに言えるから。
まだ両手であなたを抱きしめることができるから。
あなたとダンスが踊れるから。
どこも痛くなくて元気だから。
思い切り深呼吸ができて、あなたと同じ空気を吸っていただけるから。
あなたと一緒に生きていただけるから。
まだまだたくさんできることがある。
だから見えなくなってもこわくない。

もしも本当に見えなくなったら、
あなたの声を頼りに動き回れるね。
あなたに手を引かれ歩き回れるね。
あなたのすべての愛がわたしの目になってくれるね。
そうしたら、今よりもっと幸せになれるような気がする。

あー、幸せが見えてきた！



見えないけど、わたしへいきだよ

見えないけど、わたしへいきだよ。
だってあなたの笑顔が見えるもん。
あなたの笑い声が聞こえるもん。
あなたに好きだよと言えるもん。

あなたと手をつないで学校へ行けるもん。
お母さんのつくるおいしい料理のにおいがかげれるもん。
だから、わたし見えにくくてもへいきさ。

ときどき、みんながかくれんぼをしてあそんでくれるから。
いつも、わたしが鬼だよ。
でも時間はかかるけどかならず見つけているよ。
見えにくいものにしるしをつけたり、リボンをつけたりして、さがしやすくしているからだよ。
。

たまに、さがせないときに声をかけるのさ。出てこいよと。
すると、わたしの手がさわるのよ。見つけたとね。
だから、楽しいのよ。

もし本当にみんな見えなくなってもへいきだよ。
ぜったい、みんな助けてくれるもん。
だって、みんなやさしいもん。
みんないい人たちだもんね。
みんななかよしだもんね。

みんな、あそぼうよね！
かくれんぼして。
さがすの大好きになってきたよ！



わたしね、最近よくころぶのよ

わたしね、最近よくころぶのよ。
そして、壁にぶつかるの。
食べ物をこぼすの。
それに、服を裏返しにして着ていたりするのよ。
靴下もね。
おもしろいでしょう！

お父さんとお母さんが目のお医者さんへ連れて行ってくれたの。
お医者さんは言いました。
あなたの目の中にクリスタルが入っていますよ。
とてもめずらしい病気ですよ。
めったに会えない患者さんですよ。

わたしは思いました。
わー、わたしって、特別なんだ。
うれしいなー。
楽しいなー。

お父さんとお母さんがお医者さんにまたたずねました。
将来この子の目はどうなりますか？

お医者さんが答えました。
残念ながら目が見えなくなります。

お父さんとお母さんはとても悲しみました。
でも、わたしは悲しくありませんでした。
なぜなら、わたしにはやさしいお父さんとお母さんがいるもの。
かわいい妹もいるもの。
猫ちゃんもいるもん。
庭には花も咲いているのよ。
小鳥だって幸せって歌っているのよ。
だからわたしね、幸せなのよ。

えらぶ百合の花

えらぶ百合の花 アメリカに咲かちやりくぬ

南の小さな島でのわたしの幼いころの体験です。

今から45年ほど前の夕暮れどき。

母親と畑仕事して家に帰るとちゆう、遠くのほうに白く光っている物が見えました。周りは薄暗くなっていたので、とても目立っていました。

キラキラと輝く光に誘われるかのように、わたしは背中に牛の草をかついでいましたが、あまりにも美しく光っていたので、無我夢中で荷物を放り出して畑の真ん中を横切り、キラキラと光るものを目指して走り出しました。

ところが、近いと思っていたら意外に遠く、走りながら、あれはもしかして時期はずれの美しい百合の花かもしれないと思い、早く取りたい、百合を見たい、においをかいでみたいと思って白く光るところへと近づいていきました。

やはりわたしが思った通り、美しい白い百合です。

こちよい清らかな香りがします。

あー、とため息が出ました。

早く取りたい！

しかし、やぶはわたしが入っていけないほど深く、とげのつるでおおわれていました。

でも、あの美しい白百合を取りたい、そう思う気持ちがだんだんと強くなり、背伸びをしてみたり、ジャンプをしてみたり、何とか指が葉にさわるまでくり返しました。

もう少しと思った。

その瞬間にサッと強い風が吹き出し、百合が揺れ、わたしの手の届くところまで風が百合を押し出してくれました。

わたしは風を読み、わたしの手に近づいたときに思い切りジャンプして、手が百合のくきに触ったとたん、ポツキンとくきを折りました。

あー、やった、やっと取れた。

ホッとした後、自分の手や腕、足が痛いのに気がつきました。

何と切り傷だらけです。

百合の花を取るのに必死で、トゲのある野バラがたくさんあることを忘れていました。

傷の痛みより、好きな白い百合を手に入れた喜びのほうが大きく、百合の花を大事に持って走り出しました。

急いで牛の草をかついで母親を追いかけようと思いましたが、もうすっかりあたりは暗く、母親の姿は見えませんでした。

フクロウの鳴き声が聞こえたり、ガサガサと音がしたりと、一人だけの夜道はとてもこわいと思いました。

でも、取ったばかりの白い百合のすがすがしい香りのおかげでこわさを忘れ、切り傷の痛みも忘れ、何とか家までたどり着きました。

家に着くと、母親が「遅かったわね。心配したわよ」と夕食の準備をしながら言いました。

わたしは百合の花を取りに、畑の真ん中を横切って行ってたなんて言えませんでした。

それは、父親も母親も畑をととても大事に耕していて、常に畑のすみを歩きなさいと言われていたからです。

取ってきたばかりの百合の花をよく見てみたいと思い、そっと縁側においていた百合の花を取りにいき、わくわくしながら、どれだけ時期はずれの百合が美しいだろうと明るいところで見てみました。

あっれ！ どうして？ まさか？ えっ！ と、わたしは悲鳴をあげました。

なんと、美しいと思って取ってきた白い百合の花は枯れていました。

その夜、わたしは眠れませんでした。

あんなに美しく白く光っていたのに、枯れていたなんて信じられません。

わたしは不思議でたまりませんでした。

あんなに美しく白く光っていたのに、どうして枯れてしまったのかしら？

どうして暗闇の中でわたしをそこまで魅了したのかしら？

何をわたしに伝えたかったのかしら？

その日からわたしは白い百合の花が大好きになり、毎日百合のことばかり考えていました。

毎年春に咲く野生の百合が待ち遠しくなり、今か今かと夢にまで見るようになりました。

そして春になり、わたしの目は常に百合の花を追いもとめていました。

野原や道ばたのあちらこちらに野生の白い美しい百合の花が咲き出し、わたしは毎日うれしくてたまりませんでした。

わたしは学校へ行くときも、道ばたに咲いている百合の花をつみ、教室に飾りました。

教室の中に百合のいい香りが広がり、一日中百合と一緒に勉強しました。

また学校から帰るときも百合の花をつみ、家に持ち帰り家中に飾りました。

特に牛小屋などに飾るとなんとも言いようのない美しさです。

田舎のわが家にさわやかないい香りが充満していました。

そのころのわが家は貧しく、この百合の美しさといいにおいがわが家に幸せを満たしてくれました。

しかし、長くは咲き続けてくれません。

一つ一つと枯れていき、百合の花の姿が見えなくなるとさびしくなり、一日でも長く百合の花を見たいわたしの目は、百合の白しか見ていませんでした。

毎年、百合の花の時期になるとうれしくて、毎日が幸せです。

まるで百合の花に恋をしている感じでした。

こうしてわたしは大きくなり、都会に出て働き出しました。

しかし、島が恋しく、あの白い美しい百合の花が恋しくてたまりませんでした。

だから、花屋さんで百合を見つけると、値段が高くてでもすぐに買い、部屋に飾り、あのときのことを思い出していました。

それから何年か過ぎて、結婚をして、娘たちにも恵まれましたが、なぜか結婚生活はうまくいかず苦しんでいました。

こんな苦しい人生を送るために生まれてきたんじゃないと思い、離婚をしました。

そして何年かたち、あるアメリカ人からプロポーズされ、娘たちと一緒にアメリカに行くことにしました。

自由な国アメリカで自分の思う通りに一生懸命働き、また娘たちも英語を話せるようになり、アメリカに溶け込むことができました。

しかし、日本が恋しい、島が恋しい、あの白い百合の花が恋しい。

百合の季節になると、たくさんの百合の花を買い、部屋中に飾り、美しい島を思い出していました。

今から約150年前（明治32年）、日本は白い百合の球根をアメリカ、イギリス、フランス、オランダなどの国々へ輸出していました。

キリスト教の復活祭にはこの白い百合の花が飾られます。その時期にはスーパーなどの店では、どこでもたくさん鉢植えや切り花が売られています。

島が恋しい、白い百合の花が恋しいわたしにとってみれば、こんなにうれしいことはありません

だからこのアメリカに来てよかったと思いました。

また、日本では神学びにまったく縁がなかったわたしです。

神さますら信じることはありませんでした。

わが家に起きるさまざまな苦しみ、つらいことと向き合ってきましたが、あまりにも多過ぎる苦しみにとうとう最後の神頼み。

友人にすすめられて読んだ本に、日本の神道のことが書かれてあり、何とかしたい、何とか家族を救いたい思いで神学びをさせていただくことになり、わたし自身が強くなり、揺るぎない心でつらいことに向き合っていくことができました。

百合の花の妖精にお会いしてから、かたときも百合の花のことは忘れたことはありませんでした。

常にわたしを守ってくれているような気がしました。

神さまも信じていなかったわたしが、神さまを感じる事ができた。

これが百合の花がアメリカで花を咲かせる一つ意味なのかと思いました。

そして、アメリカに渡って15年が過ぎたとき、わたしたち親子の面倒をせいっぱい見てくれた白馬の天使は、病気で亡くなり天に帰っていきました。とても悲しみましたが、彼が今天国で病気もいやされ幸せに暮らしていると思うと、見送った家族も楽になりました。

わたしは150年前のご先祖さまの病気をいただき、目が失明しつつあり、今70%失明していますが、日本のすばらしい和紙を折りながら、まだ少し見える喜びをかみしめながら、毎日楽しく暮らすようにしています。

そのため、見えにくいものにはキラキラ光る物をつけたり、折り紙で小さいくす玉をつくり、それをハサミ、ペンなどにつけ、さわってすぐわかるようにしたりしました。

光って見えることが一番見えやすく助かります。

薄暗いところや黒色、茶色などは見えません。何だか昆虫の目のようです。

わたしは見えない目を愛おしく思い、また以前よく見えていたことはとてもすばらしい記憶としてわたしの脳裏にいつまでも焼きつけられています。

わたしが小さいころの夕暮れどきに、白い百合の花の妖精に誘われたときのあのキラキラ光るものが、今わたしの目のために役に立っていることを知りました。

神さまは知っていたのですね。わたしが将来失明することを。

だから小さいときにすばらしい体験をさせてくれたんですね。

それを思うと神さまの慈悲深さに涙がポロポロと落ちました。

えらぶ百合の花 アメリカに咲かちやりくぬ

ピアスがつけられません

わたしはおしゃれをするのが大好きです。

イヤリングをつけるととても楽しいです。

風が吹くと心地よく揺れ、わたしも風とともに揺れた気分になります

でもよく落としたりします。

みんながピアスにしたらと言います。

しかし、わたしはピアス用に耳に穴をあけることができません。

親からいただいた大事なからだに傷をつけるのが申しわけないからです。

みんなやっているわよと言います。

でも思い切れません。

なぜって？

それは、わたしが中学3年生のときのことです。

保険体育の時間。先生が盲腸はあってもなくてもいい部分ですと言いました。

わたしは、なくてもいいのなら取ってもいいんだとすぐ思いました。

そして、家に帰り、親にお腹が痛い、盲腸かもしれないと言いました。

親はあわてて医者連れていきました。

お医者さんは、どこが痛むの？ と聞きました。

わたしは右腹のほうを手でおさえると痛いような気がしますと言いました。

お医者さんはレントゲンを撮らずに盲腸だと言いました。

親がたずねました。すぐ手術したほうがいいのでしょうか？

お医者さんは、急ぐことはないようですが、いずれしたほうがよいでしょうと答えました。

親はため息をつきました。

わが家は経済的に余裕がないのです。

しかし、わたしは早く手術を受けてみたいと思いました。どんなふうにするのだろうかという興味があったからです。

親に痛いと言いつけました。また学校の担任の先生にも、手術を受けるので学期末テストは受けられませんと言いました。

担任の先生は、テストが終わってからではダメなんですかと言いましたが、わたしは医者がすぐ手術をしたほうが良いと言っていますと答えました。

そして、入院をして手術を受けることになりました。
痛くもなく手術をするわけですから、楽しみでたまりません。
こんなに手術を受けるのが楽しいのなら、不安がることはまったくないわ。

看護婦さんが麻酔を口に当ててわたしと話をしてくれました。
わたしはワクワクとはしゃぎながらおしゃべりをしていました。

突然、お医者さんが笑うなど、今盲腸を切っているところだからと言いました。次の瞬間、
チョッキンといい音がしました。

わたしはすぐたずねました。今切り取ったの？ 見せてよと頼みました。
すると、お医者さんは切り取ったばかりのものをピンセットではさんで見せてくれました。

わたしは大きな目をあけて見ました。とてもきれいな色をしていて、何だか愛おしく思いました。

次の日から歩き出し、病院の中を歩きまわっていました。
7日間楽しく過ごし、退院しました。

その後、手術はこわくない、楽しめばいいんだと思い続けました。
親の気苦労は知らなかったのです。

それから10年ほど過ぎたころ、わたしはショックを受けました。
そして、親に申しわけないと気づき、涙が出ました。
実はわたしが生まれる前に、姉が夜中に急性盲腸炎になり、親は電話もない、車もない時代に、
姉をおぶって1時間かけて医者のところまで運び、医者をたたき起こして手術をしてもらった
そうです。

その気苦労があり、わたしは盲腸だと言っても疑うことなく、すぐに入院させたのです。お金を
都合つけて払ってくれたのです。

そんなことは知らず、このバカなわたしは手術が楽しいものだと言っていたのです。

親の気苦労を知ってからは、手術の傷あとを見るたびに、申しわけなくて申しわけなくて、仕
送りや贈り物をし続けました。

まだ親兄弟にも本当のことが言えません。
だからピアス用に耳に穴があげられないのです。

お母さん、お父さん、お兄さん、お姉さん、ごめんなさい！
からだを大事にして長生きしますので許してください。
お願い！

小学校を浪人した

ある南の小さな島でのことです。

わたしは一番上の姉と町まで歩いて、1時間かけて黄色いカバンを買いにいきました。もうすぐ幼稚園に入るからです。

買ってきたばかりのカバンをつけて走りまわり遊んでいました。

そこへ近所の一つ上のお友だちが急いで来ました。

そして、「先生があんたの名前を呼んでいたよ」と言いました。

わたしは何のことかさっぱりわかりませんでした。

今日は小学校の入学式だったようです。

夕方、親が畑仕事から帰ってきたのでそのことを話しました。

お父さんもお母さんも顔を見合わせ考えていました。

わたしとすぐ上の姉とは2歳違いです。姉が3年生になったらわたしが1年生になると親は考えていました。

親たちはまだ考えています。もしそうなら役場から入学のお知らせがあるはずだがと。

お母さんは、今から校長先生の家に行くと言い、服を着替え髪を整えてからわたしを連れて出掛けました。

学校までは細い道を通って行きました。

そして、校長先生の家のお応接間に入り、イスに座りました。お母さんが説明をしました。

今年、この子は幼稚園に入り、来年1年生になるつもりです。

今日は幼稚園のカバンを買ってきたところですよ。だから入学は来年にしてくださいと頼みました。

校長先生も母親が強気で言うので、それでいいですと答えていました。

わたしはこんなことを気にすることなくよく遊びました。

そして1年が過ぎ、春、わたしがやっと小学校に入学できる日が来ました。

名前を書いたハンカチを胸にピンでつけてもらい、一人で学校に行きました。学校に行くとみんなが校庭で遊んでいました。

あー楽しそうだなと思い、一緒に遊んでいました。

そこへ近所のお姉さんが来て言いました。

「あなたのお母さんは来なかったの？」

わたしはお父さんもお母さんも畑に行ったと言いました。それを聞いた近所のお姉さんはびっくりしていましたが、わたしはわかりません。学校は一人で行くものだと思っていたからです。

みんなが教室に入っていきますが、わたしはどの教室かわかりません。字が読めないからです。

。入り口でうろうろしていたら、友だちのお姉さんが来て、あんたはこの教室だよと教えてくれました。

教室にはこどもの親も来ていました。みんなこどものそばに立っていました。

わたしは一人で座り、教頭先生のお話を聴き、帰りにきれいな色のあられのお菓子をもらいました。

本もたくさんもらい、時間表ももらいました。

みんな親に手を引かれて帰っていきましたが、わたしはさびしくありませんでした。

だって、親は畑仕事が忙しいと言っていたからです。

家に帰って、親にもらって来たものを見せました。お母さんが時間割表に書いてある通り、本とノートをランドセルに入れなさいと言いました。

わたしは「こくご」「さんすう」と書いてある文字も読めませんでしたので困りました。学校は楽しいところだと思っていたけど、けっこうたいへんだと思いました。

お母さんはわたしがまだ字を習っていないことを忘れています。

こんな親なので、卒業式など一度も学校に来たことがありませんでした。

こどもが多く、忙しいのです。

毎日働かなくてははいけません。わたしたちを育てるためです。

また、わたしも親が朝から晩まで一生懸命にわたしたちのために働いている姿を見ていたので、入学式や卒業式に親が来てくれなくても平気でした。

わたしは親のお手伝いがしたかったからです。

そして、わたしの自慢の親だからです。

お父さん、お母さん、育ててくれてありがとう！

初恋

これはないしょのお話です。
わたしは16歳で学校の先生と恋愛をしました。
彼はとてもわたしを愛してくれました。

しかし、先生と生徒の恋愛はいけません。
彼は悩みました。わたしも困りました。
親がとてもきびしいのです。
だから二人は人目をかくれてデートしました。

ある夜のこと、いつものようにわたしの家の近くで会っていました。
すると、だれもいないはずの野原でガサガサって音がしました。
人がそばにいるのかと心配で、じーっとだまっていました。

しばらくして、父親がわたしの名前を呼んでいます。
わたしは親にバレたと思い、はいと言って急いで家に戻りました。
これは怒られるに違いないと思って部屋に入ったら、父親はイビキをかいて寝ています。
あれ、今わたしを呼んだのはだれだろうと不思議になりました。

その夜以来、彼には会っていません。
なぜって？
その夜の2日後、彼は交通事故で亡くなったのです。

わたしは彼の死を知って、少しホッとしました。
なぜって？
親にだまっているのがつらかったからです。
いつもいけないことをしていると思っていたからです。

でもわたしは毎日泣きました。
どんなみにくい顔でもいいから戻ってきてほしいと思いました。
どんな草花でも、風でも、何でもいいからわたしに声をかけてほしい。
彼の面影を追いました。

あるとき、事故現場を見た人から話を聞きました。
彼は血まみれになりながら立ち上がり、少し歩いて倒れたそうです。
それを聞いてうれしくなりました

なぜって？

彼は死にかけているのに最後の力を出したのです。

わたしのために立ち上がったのです。

この彼の最後の行動が、わたしを生き続けさせたのです。

彼の最大の愛のメッセージをもらったからです。すてきな力の贈り物です。

つい昨日のような気がします。

今でも思い出すと胸が熱くなり、彼のぶんも生きようと思います。

わたしは早弁食いの選手です

わたしはとても食いしん坊です。
食べるのが大好きです。

高校に入って、お母さんが自分でお弁当をつくりなさいと言いました。
お父さんがお金をくれました。そのお金で弁当のおかずを買うのです。
やりくりして残ったら、わたしのおこづかいとして使えます。

やったあー。おこづかいは今までもらっていませんでした。
さっそく町へ自転車に乗って買い出しに行きました。

まず、魚の日干しをたくさん買い、つくだ煮にします。
それと、卵と昆布も買いました。
お野菜は畑にたくさんあります。助かります。
休みの日に魚と野菜のつくだ煮をつくりました。

そして、いよいよお弁当づくりが始まりました。
おいしそうにつくりました。
学校に持っていき、弁当の時間が待ちきれませんでした。

やっとベルが鳴り、お弁当が食べられます。
自分でつくったお弁当はおいしいです。
毎日自分でお弁当をつくり、食べていました。

あるとき、担任の先生がわたしに「ぼくのクラスの生徒で早弁をしている生徒がいるそうだ。
きみじゃないよね」と笑いながら言いました。
わたしも笑いながら違いますよと答えました。
だって、自分でつくるお弁当のおかずを知っているから、暖かいうちに食べたほうがおいしい
からです。

いつも昼食時間の2時間前に食べ出し、お昼には半分しか残っていません。
放課後におなかですくのでお弁当箱を大きめにしました。

クラスの仲間も先生方も公認の早弁食いに堂々となり、高校の3年間、わたしは選手代表でした
。

ごちそうさまでした。みんな "声援"ありがとう！

わたしのお母さん

わたしのお母さんは92歳で元気です。
南の暖かい島で兄の家族と一緒に暮らしています。

ある日、わたしは島のお母さんへ電話をかけました。
お母さんは耳が聞こえにくくなっていました。

いろいろお話をしてから、わたしはお母さんに伝えました。
「お母さん、あのね、わたし将来失明するらしいよ」と明るい声で言いました。

すると、お母さんはわたしに言いました。
「わたしはこどもがたくさんいるから、一人ぐらい目が見えない子がいてもかまわない」と言い切りました。

それを聞いて、あーたいしたことではないんだーと思いました。
お母さんは動揺するよしもなく、平気な感じでした。

電話を切った後、わたしは何だか勇気がわいてきました。
母親が、自分の娘が失明しようがきっと乗り越えていけると願ったからです。
わたしは母親から大きな希望と勇気をもらいました。
こんな励ましは初めてです。これ以上の励ましをもらったことはありません。

母親が娘の失明を平気なわけがありません。
親心を知れば、わたしが見えにくくなっていても、落ち込むこともなく、見えないことを逆に楽しく活かして暮らすことが親孝行だと思いました。
おかげさまで毎日楽しく、ゆかいに暮らしています。

お母さんの子でよかったわ！
ありがたい親心、感謝しています。

わたしのお父さん

わたしのお父さんはとてもゆかいな明るい人でした。
でも、きびしくてこわかった。
しかし、わたしが病気のときはとてもやさしくしてくれました。
わたしはお父さん子でした。

戦争で左手が負傷して、くの字に曲がっていました。
島一番の大酒飲みで有名でした。
わたしがこどものころは、毎晩のように酒仲間が家に来て、戦争の話をしたり、軍歌を歌ったりしていました。
おかげでわたしまでが口ずさむほどです。

わたしが中学生のころも、同じように毎日のように酒を飲んでいました。
二日酔いもあり、畑仕事ができないときがありました。
ご近所のおじさんたちは、酒を飲まずに毎日畑仕事にせいを出していました。

わたしは父に言いました。
お父さんは恩給をもらっているからなまけている。近所のおじさんはもらっていないから一生懸命に働いていると。
父は笑っていました。
わたしはときどき父に文句を言っていました。

父は67歳で亡くなりました。
亡くなる数日前、わたしの夢枕に出てきました。
そして、わたしは死んでいくけど、なんで父親が死んでいくのか兄弟みんなで話し合ってくれと言われました。
酒の飲み過ぎが死を早めました。

その後、父のことを理解する間もなく時は過ぎ、わたしも人生の半分を過ぎたころ、ようやく理解できるようになりました。
父は酒の力を借りてでも戦争の話をする必要があったのです。
毎日、何十年も酒を飲みたくなるほどのつらい経験をしたからだ気づきました。

こどものころに、酒を飲む父親に文句を言っていたわたしは許せません。
戦争も決して許せません。
今でも戦争状態の国があると思うと悲しくなります。

人々が助け合う世界になってほしいです。

父は戦争について話し合っただけでよかったかもしれません。

世界中ではどれぐらいの人が今でも同じような心の苦しみを抱えているのかと思うとやるせないですね。

また、その周りの家族が理解してほしいですね。

戦争で多くの犠牲が出て、いまだにその傷が癒やせない人がたくさんいます。戦争は終わっても、人の心の戦いは終わりがありません。

この終わりのない戦いの中から学んでいくことを、神さまはお与えになったのでしょうか。

わたしたちは犠牲の後にしか学ぶことができないのでしょうか。

もう十分に学んだはずですが。

戦争という言葉がなくなる世にしていきたいですね。

みんなの願いです。

願いがかなうよう、みんなで努めてまいりましょう！

コーラですか？

わたしは22歳で喫茶店を開くことにしました。

ひとりのできる店を不動産屋さんと見てまわりました。

まず店を見つけ、それからお金を借りる計画でした。

あまりにもしろとな考え方に、不動産屋さんもびっくりしていました。

でも、わたしがあまりにも真剣なので、4、5年売れずに困っていた物件を紹介してくれました

。

持ち主が分割払いで権利を売ってくれました。

カウンターに7人、4人掛けのテーブルが二つの15席の小さな店です。

古い建物で2階に住むことができました。

会社に退職願いを出しても認可してくれません。

会社勤めをして4年近く。

上司は、田舎育ちのわたしがだまされているのでは？ 商売を始めるなんてとんでもないと心配をしていたのです。

わたしはすでに結婚して1年あまりでしたが、心配していただいたのです。

開店の準備は着々と進み、開店日も決めたころ、3度目にして了解していただき、退職願いに認め印を押してもらいました。

認めてもらうときに条件があり、商売を始めてから毎月の経営報告をする約束をしました。

開店に必要な物を業者に依頼しました。

しかし、準備資金もありませんでしたので、業者の方々みんなを店に集めて説明をしました。

わたしはお金なしで今から商売を始めますが、みなさんから仕入れた代金は必ずお支払いしますので、少し待っていただけませんかと言いました。

そして、業者一人一人に、あなたは何か月待っていただけますか？ と聞きました。

1か月、3か月、半年とみなさんに答えていただきました。

みなさんもびっくりです。こんなことは初めてのようでした。

しかし、わたしは真剣でしたので、みなさんに後払いにに応じてもらいました。

そして開店です。朝6時から夜8時まで営業をしました。

店の名前は「花屋敷」とつけましたので、お花だらけです。

開店早々に常連客もたくさんでき、いつも満席状態でした。

ある夕方、いつものように常連客はカウンター席に陣取っていました。

そこへ3人組の男性がテーブル席につきました。

忙しかったので、すぐにお水やおしぼりを持っていきませんでした。

「こっら」と聞こえました。

わたしはとっさに「コーラですか？」と言いながら、お水とおしぼりを持っていきました。

そして「ご注文はコーラと何でしょうか」とたずねました。

お客さまは「コーヒー二つとコーラ一つ」と言いました。

「かしこまりました」と答えて、つくって持っていったときにわかりました。

この3人組が普通のお客さまでないということに気づき、こわくなりました。

しかし、常連客がたくさんいたので少し安心です。

そのころ、父が島の特産品の砂糖豆を送ってくれていたのも、お客さまみなさんにおすそ分けをしました。

もちろん3人組にも持っていき、田舎から送ってきたものですが食べてくださいとテーブルに置きました。

3人組はだまって頭を下げていました。

しばらく小さい声でこそこそと話してから、お金を払い帰っていきました。

その後、他のお客さまが、あれはおどしに来ていたんじゃないのか？ と、口々に話していました。

わたしは世間知らずというのか、また小さな田舎ではこんなことを聞いたことも経験したこともなかったのです。

3人組がおとなしく帰ってくれたのは、他のお客さまと同じように普通に対応したのがよかったのだと思いました。

人があの人には悪い人だと言っても、同じように悪いと思うことはない、自分が感じる評価でよいのだと思いました。

この教訓は、その後の商売でたいへん役に立ちました。

外見だけで勝手に評価してはいけない。

みんな本当は善人ばかりです。

すばらしい心も持って生まれてきたのです。

その素直な心を世間がゆがめていないでしょうか。

大事なあなたさま

ありがとう！ あなたはわたしを待っていてくれたね。

わたしの大事なあなたさま、どこへ行っちゃたのよー。

ごめんね！ またあなたを見失っちゃったわ。

今日は午後から着物を着て出かけるから、いろいろと忙しくしてたのよ。

シャワーを浴び、髪をアップして鏡を見たとき、あなたは一緒だったわ。

行く前に、まずはトイレのお掃除。

ピーンポンと玄関へ。はいはいと走っていったわ。玄関の荷物を取って部屋へ。

また手紙を出しに外へ。そのとき切手を貼ってあるか確認したとき、あなたはいたかどうか？

庭に出てきれいなお花をつみ、トイレと神だなに飾ったわ。

日本へのお手紙も二通出しに外へ出たわ。

そして、ゴミの収集日なのでそのゴミ箱をとっていつものところへ持ってきて、行灯がズレていたのよ、よいっしょと直したわ。

昼ごはん用にお野菜をいろいろ切って、チャーハンをつくったわ。

みんなで食べて、かたづけをして。

そして、いよいよ着物を着ようと思って2階の部屋へ。

その前にメールをチェックと思ったとき、あなたがいないのに気がついたわ。

どこであなたと離ればなれになったんだろう。

あ？ 神さま、お願いします。また見失いました。わたしが悪いのです。

ひもでつないでなかったから。あれだけみんなが離れないようにひもでつないでおいてねって言うのに。

神さま、今度はちゃんとひもでつないでおくから、どこにかくれているのか教えてください。お願いします。

神さまが言いました。

まずは少し反省をなさい。

いつもみんなに感謝していますか？

お部屋をかたづけていますか？

整理整頓していますか？

使った物をもとのところにもどしていますか？

……。

神さまはいっぱいわたしに問いかけてくれました。

わたしは神さまの問いかけに一つ一つ反省をしました。

家族のみんな、すみません、いつもお騒がせして。

いつもさがし物を手伝ってくれてありがとう！

お部屋を掃除しました。

ちらかっている部屋をかたづけました。

次に使った物をもとのところへ直しましたか？

ここで止まりました。まだ思い出せません。

またかたづけを。

その夜、寝るときに神さまへまたおわびをしました。

そして、わたしのどんなところが悪いのか教えてくださいと祈りました。

次の日にまた、部屋をかたづけながらさがしました。

家族も心配してさがしてくれましたが見つかりません。

そして、午後に庭の木の手入れをしていました。

去年より見えにくいなあと思いながらも、毎年手入れをしている木の葉をチョコチョコと切りながら思いました。

見えにくいけど、かんが働いているので上手に切れていることに気づき、また、過去によく見えていたことはすばらしいことなんだと思ったら、ありがたくなり涙が出ました。

そして、感謝して木の手入れを終え家のほうへ歩き出したとき、何かが光っています。

何だろうなあ、と近づいてみたら、そこであなたはわたしを待っていました。

そこは昨日、花をつんだ後、花を落としてかがんだところでした。

あなたはわたしにお掃除をさせ、部屋のかたづけをさせ、庭仕事をさせ、そして家族に感謝をさせてくれましたね。

また、過去に見えていた記憶がどれだけすばらしいことで、ありがたいことに気づかせてくれましたね。

だから、神さまはあなたの居場所を教えてくれたんですね。

ありがとうございました。

わたしの大切なメガネさん、いつもありがとう！

今後から迷子にさせません。

ちゃんとひもでつないでおきます。

あなたと楽しい人生をずっと送ります。

約束します！

お母さんは一人で楽しんでいたのね

わたしには娘が3人います。
夫婦で喫茶店をやっています。
朝早くから夜遅くまで働いています。

料理、洗濯、掃除は夜帰ってからやります。
いつも忙しく、ていねいに掃除ができません。

ある休みの日に、こどもの2段ベッドが運ばれてくることになりました。
娘たちはうれしくて待ち切れません。
みんなでお部屋の掃除を始めました。
楽しくかたづけをして、拭き掃除をしています。
そこで娘が言いました。
お掃除は楽しいね！ お母さんは今まで一人で楽しんでいたんだね！
わたしはハッとしました。
いつも忙しく、少し文句を言いながらかたづけをしていたことが、楽しいことだったんだと気づかされました。

家族のために料理ができる。洗濯ができる。お掃除ができる。働くことができる。
みんな家族がいるからできたことでした。
家族のため、だれかのために何かができる。させてもらえる。させてただける。
こんなにすばらしいことはありません。
小さな娘に大事なことを教えてもらいました。
それからはすることすべてが楽しくなりました。
ありがとう！

別れただんなさまがごめんと

わたしは縁ある人と結婚しました。
娘3人に恵まれました。
残念ながら17年後に離婚しました。

それから15年後に娘が父親に電話をかけました。
父親が娘に、仕事をしているかと聞きました。
娘は、いや何もしていないと答えました。
父親が、どうして？ と聞きました
娘が、調子が悪いのよ、小さいときのことがあるからねと、泣きながら言いました。
父親が、俺もそう思っている、俺が悪かったと言いました。
娘はそれを聞き、泣き出して声が出ません。
そこで、わたしが電話を取り話しました。

わたしは彼に、悪かったと言ってくれてありがとう、あなたは偉いわ、上出来ですよと言いました。

父親は大声で泣き出し、俺が悪かったと言ってくれました。
わたしは彼に言いました。
あなたもたいへんだったのよね、仕事でストレスがあったから。
別に子どもたちにはあなたが悪いとは言ってませんよ。安心してちょうだい、
縁があってあなたと結婚した。
縁があって娘たちが生まれた。
縁があって離婚ができた。
縁があってまたこうして話ができたと言いました。
彼は大声で泣き、ありがとう、ありがとうとくり返し言い続けました。
わたしは受話器を娘に渡しました。
そして、父親が娘に、お母さんのこどもでよかったねと言いました。
娘は、わたしもお父さんのこどもでよかったよと言いました。
父親はまた泣き出して、ありがとうと言いました。

電話を切ってから、娘は、この会話ができることが夢のようだ、過去のできごとがうそのよう
だと言いました。

わたしも、まさかこんな会話ができるとは思っていませんでした。
離婚後も娘たちに、お父さんは子ぼんのうだった、真面目だったと言い続けていました。

娘は彼氏ができてもうまくいかず悩んでいました。

男性自体が信頼できませんでした。

父親が許せなかったからです。

この電話の後、娘は、男性が信じられるようになったと言いました。

そして父の日、娘たちは贈り物にと手紙を書きました。

今度遊びに行くから。

いつもお父さんのことを考えているよ。

からだに気をつけてね。と書いてありました。

今思えば、どこでうまくいかなかったのかと、娘たちと話すことがあります。

彼女たちの将来の参考になればいいのです。

娘たちは絶対にこどものためにもいい家庭をつくらと言っています。

愛していたから日本食が好き

わたしの旦那さまはアメリカ人です。彼は日本食が大好きです。
わたしのつくる食べ物はみんな食べてくれます。

ある日、友だちが遊びに来て食事をしました。

お友だちはびっくりしています。

何を？

わたしの旦那さまが 日本食をおいしそうに食べているからです。

どうしたの？

いやー、わたしの旦那はそんなに食べてくれませんよと言いました。

わたしは、あれー、普通じゃないの？ と聞き返しました。

友人は、他のアメリカ人の旦那さまでもそんなには食べませんよと。

わたしは不思議でした。

わたしは日本食のほうがからだによいと思い、毎日みそ汁にごはんとお茶と日替わりで、野菜はサラダ、酢の物、炒め物、煮物、天ぷら、きんぴら。

魚はお刺身、焼き魚、煮魚、揚げ物。

鳥肉は唐揚げ、照り焼き、親子丼、サラダ、お吸い物、みそ汁、煮付、カレー。

豚肉は炒め物、トンカツ、唐揚げ、お好み焼き、煮物、みそ汁。

牛肉はステーキ、すき焼き、牛丼、シチュー。

魚介類は天ぷら、バーベキュー。

お米はごはん、おかゆ、五目ごはん、巻き寿司、ちらし寿司、焼きめし、おにぎり、五平もち

。

おもちはずんざい、お雑煮、焼きもち、揚げもち、草もち、桜もち。

そばはざるそば、そばサラダ、年越しそば、焼きそば、中華そば、冷やしそば。

うどんは煮込みうどん、やきうどん。

そうめんは冷やしそうめん、みそ汁そうめんをつくります。

ときどきアメリカの料理をつくります。

はじめは日本食とアメリカ食は5対5でした。自然に9対1に、そしてしまいには9.9対0.1になりました。

最初は日本食になじみがなく食べませんでした。

わたしがからだにいいからとすすめるうちに好きになりました。

しまいにはあれが食べたいと言い出すほどでした。

わたしも楽です。好きな日本食ばかりつくればいいのですから。

今は、彼は食べられません

なぜって？

今、彼は天国にいます。

わたしのつくるすべての料理をおいしく食べていたのは彼の愛だったんですね。

今でも彼のぶんをつくっています。

天国のあなた！ 大好きなごはんの時間ですよ。めしあがれ！

もしもし！

わたしの旦那さまはアメリカ人です。
彼の娘さんはわたしにももしもしと言います。
また、妹さんもわたしにももしもしと言います。
わたしとのコミュニケーションを深めるときに使われます。

電話のときはもしもしです。英語ではHello（ハロー）です。
このHelloは日本語ではこんにちはですね。

わたしは以前スーパーの中で寿司バーをしていました。
いろんな国のお客さまが来ます。みんな英語で話します。
ときどきその国の言葉を教えてもらい、次に来たときに話せるようにノートをとりました。
こんにちは、ありがとうの二つだけです。
この二つの言葉だけでお客さまは笑顔になります。
お客様もありがとうと日本語で言ってくれました。
とってもうれしかったです。

みんな母国語を聞くとなぜがほっとします。安らぎますね。
なぜでしょう？
それだけ愛しい国、なつかしい国、ありがたいものなのですね。
生まれ育ったところ、国があることはすばらしいことですね。感謝です。
ありがとう！

孫娘は養女へ

わたしの旦那さまはアメリカ人です。彼の孫娘はとてもかわいい子です。
彼女のお父さんはいません。お母さんは問題があります。
彼女が生まれたときからわたしが世話をしました。

あるとき、赤ちゃんが泣きやみません。お母さんは困っています。
みんなであやしていますが泣きやみません。
そこでわたしがだっこして、トントンと背中をたたくと泣きやみました。
みんながあっけにとられていました。
それからはわたしが子守唄を歌ったり 離乳食のおかゆなどを食べさせたりしました。
そして歩けるようになりました。ずっとわたしの後を追いかけてきます。
はじめてのことばの絵本を見て遊びました。

彼女は悲しいときや眠たくなるときに泣きながらこの本を持ってきて、わたしのひざにすわり絵本を広げます。

悲しいことに、最初にしゃべった言葉がApple（アップル＝りんご）でした。
それから彼女が5歳のとき、彼女のアメリカのおばあちゃんの家で暮らすようになりました。

ある日、おばあさんはつかれたのか、彼女の面倒を見てほしいと言ってきました。
車で10時間ほどの遠いところから、おじいさんが連れてきました。
わたしは大きくなった彼女と抱き合って泣きました。
彼女の好きな日本食をつくり、一緒に寝ました。
そんなとき、彼女がわたしに抱きついてきました。わたしも強く抱きしめました。
そして、彼女が言いました。
歌って！
何を？
いつも歌っていた歌を！
あー、子守唄ね！
わたしは、ねんねんころりよーおころりよーと歌いました。
彼女が眠るまで何度もくり返して歌いました。
わたしと彼女のほおには涙が流れていました。

大きくなった彼女に着物を着せてみました。
着物がよく似合います。
彼女は着物を着たときに気をつけることなどをわたしに聞きました。
歩くのはどうゆう風に歩くの？

階段はどんなふうを上り下りするの？

おトイレは？ と聞きました。

わたしはていねいに教えました。

帰るときは、彼女の好きな日本のお菓子、お米、のりなどを持たせました。

彼女が10歳のとき、おばあさんはわたしたちにないしよで養女にやってしまいました。

わたしもだんなさまも、とてもショックで悲しみました。

しかし、彼女のためには元気なお父さん、やさしいお母さんが必要なのです。

彼女が13歳の夏休みに遊びに来てくれました。

そのころ彼女のおじいさん、わたしのだんなさまは病気であまり動けません。

苦しそうに息をしていました。

それを見ていた彼女が言いました。

おじいちゃんはたいへんだから、わたしを引き取ることができなかつたのね、と言いました。

わたしはうなずきながら、そうなのよ、それにね、わたしも目が見えにくくなっているのよ。

きっとあなたの新しいお父さん、お母さんはいい人だから、あなたはラッキーなのよ。またいつでも会えるからね。

いつでもあなたのことを思っていますよと言いました。

彼女はうなずきました。

しばらくしておじいさんは天国へ行きました。

彼女も悲しみました。

しかし、わたしは彼女に言いました。

あなたが立派なおとなになり、幸せになることでおじいさんは喜ぶのよ。

だからね、わたしも目が不自由でも明るく楽しく暮らすことにしているのよ。

そのほうが彼は安心だと思うよ。

悲しまずに楽しく毎日を送りましょうね。

彼がわたしたちを見守っていますよ。いつまでもね。だからがんばろうね！

それを聞いていた彼女は明るい顔になりました。

それから時はたち、彼女から電話がありました。

もしもして日本語で話しかけてきました。

彼女は日本語の勉強をしているとのこと。日本語を交えてしゃべりました。うれしくなり涙があふれだしました。

つらいこと、悲しいことを経験すると、喜びがこんなに大きく感じるものですね。

苦勞をするとよいことがあると言われるのは、こういうことなんですね。

あーうれしいわ！

リスの首飾り

ある日曜日、買い物の帰り道に、だんなさまがちょっと寄っていかうかと宝石店に入り、これはどうだと指を指しました。

わたしは、あーいいね、でも高いわと言いながらうでにはめました。
赤や黄色そして青色の宝石とダイヤのすてきなブレスレットです。
だんなさまはこれを結婚10周年の記念にと言って買ってくれました。
わたしの編み物のドレスによく合います。
いつもつけて楽しんでいました。

それから3年後。

ある日、食事に出かけるのでおしゃれをしました。
そのブレスレットをつけ、外で娘が迎えにくるのを待っていました。
まだ時間があるので、植木を切ることにして、チョッキンチョッキンと切っているとき、ブレスレットが少しじゃまだなあと思いました。
そして迎えの車に乗りレストランへ。

食事をして、おしゃべりをして帰ってきて気がつきました。

ブレスレットがないことに。

すぐにレストランに電話をしましたが、ありませんと言われました。
ならば庭に落としたのかと思い、みんなでさがしましたが見つかりません。
残念だわ。大切な物を。でもいいわ。
だって、すてきに着飾っても見せるだんなさまがいないだもん。天国へいっちゃったの。
でも、庭仕事のときは気をつけて見えています。

ある昼下がり、裏庭でリスのカップルがなにやらさわいでいます。

メスのリスさんがキラキラとした首飾りをつけています。

近づいてよく見るとあのブレスレットです。

リスさんが庭から見つけたのね。そしてすてきな彼女にプレゼントしたのね。

いいわよ。あなたにあげるわ。よくお似合いよ。

女性は愛する人のためにおしゃれをするのよ。そのときが一番美しいのよ。幸せなのよ。

だから落とさないで。おしゃれをしていつまでも幸せにね。

わたしも幸せだったわ。思い出だけでも幸せな気分よ。



わが家に来る万の神さま (1)

わたしの困ったことは、とても寒い冬から始まりました。

愛するだんなさまが病気で亡くなり天に帰ってから、ときどきわが家には万の神さまが来るようになりました。

それは、わたしが困っていたからです。

アメリカに住んでいますが、英語がうまく話せません。よく理解できません。また目がよく見えません。

難しい書類を英語で書かなくてはいけませんので来てもらいました。

その書類に必要なものをそろえ、またわからないときは相手に電話をかけてくれました。

そして、その書類を出してくれました。

お礼を言いました。たいへん助かりました。ありがとう！

また次々と難しい書類が来ました。同じように万の神さまに来て、やってもらいました。

またたいへん助かりました。ありがとう！

今度は台所の料理台から火花が飛び散ったので、こわくて万の神さまに電話をかけました。

すぐに来てくれました。直りそうもないので新しい物を買うことにしました。

神さまはパソコンでどの機種がいいのか、どの店がお値打ちか調べてくれました。

そして、何軒も行って見てまわりました。一番よかった店で買い、家に運んでくれました。

次の日に古い物を取り外し、新しい物を取りつけてくれました。

普通は店の人が取りつけてくれますが、余分にお金がかかるので、神さまがいろいろと調べていねいに上手に取りつけてくれました。

またたいへん助かりました。これで料理ができます。ありがとう！

次は風呂場の水はけが悪いので、また来てもらいました。

まず、風呂に水を入れ、流して様子を見て、針金を差し込んでみたり、ポンプで押ししてみたりしましたがダメでした。

しかたがないので水道屋さんに電話をかけて説明をしてくれました。

そして、水道屋さんが来るときに、神さまも来てくれるとのことでした。

次の日に神さまが水道屋さんに説明してくれて、直してもらいました。

おかげさまで、またお風呂に入れます。

神さま、ありがとう！

今度は税金の申告をしなくてはいけません。

これは一番複雑で難しく、たくさん書類をそろえる必要があります。

わたしのできるものは全部そろえ、後は神さまが計算してくれました。そして提出してくれました。

何日かして税金が戻ってきました。もうかった。神さまの計算がよかったです。ありがとう！

また書類が来ました。今度はわたしの目の病気についてのものです

わたしは遺伝で目が失明しつつあるので、障害年金の手続きをしていたのです。

またもや神さまに電話をかけました。神さまは必ず時間どおりに来てくれました。

そしてその書類にたくさん書き込み、また医者を書くところもあったので、目の病院へ持って行ってきて、またでき上がったときに取りにいてくれました。

そして、それを提出してくれました。あーやれやれ、また助かっちゃった。ありがとう！

ゆっくりする間もなく今度は、芝刈りの時期に芝刈り機を動かそうとしましたが、エンジンがかかりません。

また神さまに電話をかけ、来てもらいました。

調べてもらい、フィルターの掃除をしたり、オイルを変えたりしてから、エンジンを動かしてみました。

そうしたら見事に大きな音を立ててエンジンがかかりました。これで安心して芝が刈れます。またもやありがとう！ 神さまは機械類が得意のようです。

神さまは日本の料理が好きです。

また、日本のすばらしい和紙でくす玉をつくり、小物をつくって差し上げました。

それがわたしからのできる限りのお礼です。神さまも喜んでくれます。

なんせ神さまは、お金は受け取ってくれないのです。

ある夏のころ、今度は天気なのに遠くから雷さまの音が聞こえてきたので、久しぶりの雷さま、大好きだよーと言ったら、急に雷がわが家のすぐ側の大きな木に落ちました。

スプリンクラーが急に動き出しました。あー雷さまにやられたと思い、また神さまに電話をかけ、来てもらいました。そしてスプリンクラーの機械をチェックしてもらいました。

雷さまで器具がこわれていたので、スプリンクラーの専門の人に連絡を取ってもらい、次の日に来てもらい、神さまも同じ時間に来て説明をしてくれました。

そして、無事に新しい機械を取りつけてテストをしてくれました。

今回もヤレヤレと思い、神さまにお礼を言いました。

次の日、洗濯機がずーっとまわっていることに気がつきました。これも雷さんの仕業です。

また神さまに電話して、事情を話して来てもらい、神さまが洗濯機を見ましたが、やはり雷さ

まのせいでコンピューターがこわれているとわかりました。

またもや神さまは電気店に電話で聴き、お値打ちな店に行き、わたしの好きなタイプを買い、届けてもらうようお願いしました。

数日後、洗濯機が届く日の前日に神さまが来て、洗濯機を置く部屋のドアを外してくれました。

そして、店の人が取りつけてくれました。

また神さまが正しく取りつけてあるか見に来てくれて、使い方の再チェックをしてくれました。

またまた助かりました。ありがとう、神さま。

本当に神さまは親切です。

もうこれでおしまいにしてくださいと思っていたら、次の日、デスクトップコンピューターのモーターが急に作動し始め、止めることができません。あーこれも雷さまの仕業でした。

この件に関しては神さまには何もしてもらいませんでした。偶然にいた方が部品を買ってきて直してくれました。

たまには神さまもお休みをしてくだいね。

次の日に様子を見に神さまがお妃さまを連れて来てくれました。

神さまの奥さまは、もうこれ以上とみよにトラブルを与えないでとわたしを抱きしめながら言いました。

わたしは涙がこぼれました。神さまのお妃さまはとてもやさしい方です。さすが神さまと結婚しているだけあります。彼女の声を聞いているだけでもいやされました。

こうしてパソコンのモーターも新しくなり、やれやれと、もうないでしょうと万の神さまもお妃さまもそう言って帰りました。

わたしもそう願ひ、しばらくは困ることはないだろうと思ひ、自分の好きなことをすることにして、和紙を使い折り紙を折り楽しんでいました。

そして和紙の柔らかさにいやされて、今まで起きた困りごとがうそのような気分になりました。

困りごとを一つ一つかたづけることができた喜びとともに、神さまにも感謝をしました。（続く）

わが家に来る万の神さま (2)

夏も終わったころ、今度は車のエンジンがかかりません。バッテリーがないのかもしれませんが。

すぐ神さまに電話をかけました。しかしお留守です。

しかたがないので業者に頼んで直してもらいました。お金も払いました。

秋になったころ、わたしが商売を始めたいと神さまに連絡したら、必要な書類をそろえて準備をしてくれました。

その商売は日本の和紙を使ってイヤリングやくす玉などのアートの飾り物をつくって、イベントなどで売る商売です。

商売の手続きが終わってすぐに大きなイベントがあり、たくさん商品をつくりました。

そのイベントの会場には、神さまのトラックで飾り物や商品などを運んでもらいました。

準備を手伝ってもらい、また終わったころにかたづけにきてくれました。そして、家まで運んでくれました。すこし神さまは息が苦しそうでした。

あー神さまはもう歳だからつかれるんだと思い、これからは神さまをねぎらわなくてははいけないと思いました。

イベントは大成功です。おかげさまで評判がよかったので、すぐ次の仕事 came ました。

これは日本のオペラ「蝶々夫人」です。このオペラで日本の雰囲気を出してほしいとのこと
です。

話し合いに神さまと一緒に、オペラの監督兼会長さんに会いに行きました。

神さまもこんな仕事は初めてなので、とても面白がってくれました。

この件に関しては、神さまがオペラ側と連絡をとり、わたしに説明することになり、神さまがメールや会場の設営係の人とやりとりしてくれました。

2か月先の話です。わたしは日本のお手伝いができる喜びました。

毎日3時間の睡眠で、いろいろな作品をつくり続けてがんばりました。

絵がたくさんでき上がったので、神さまにお願いをして額縁に入れてもらい、ワイヤーをつけてもらいました。

そうしている中、クリスマス時期になり、この1年間に神さまにはたいへんお世話になったので、お礼にプレゼントをたくさん持って神さまの家に行きました。神さまの家はとてもきれいなお庭があり、家の中もとてもすてきでした。

お礼をいっぱい言って帰るときに、神さまもわたしにプレゼントをくれました。クリスマスカードにはわたしのお手伝いをさせてくれてありがとうと書いてありました。

それを読んだとき、涙がたくさんこぼれました。わたしのほうがお礼をするはずなのに、神さまもわたしに感謝しています。

なんて、なんて心の広い、暖かい神さまなんだろうと思いました。

やはり今日はクリスマスなので、大きな心のプレゼントをいただきました。

年があけてオペラの会場に飾りつけのため神さまが連れて行ってくれました。

そして係の人と話し、手伝ってくれました。

その当日に、神さまはトラックを持ってきて、大きな花びんにいけた桜の花や絵、商品などを積み込み、会場へ運び、さっさと準備をしてくれました。

オペラが終わるころにまた神さまが来てくれて、かたづけをして、わが家に運びこんでくれました。

神さま、おつかれさまでした。

オペラが終わったのでお礼に行きたいと神さまに頼みました。

大雪の日に神さまはわたしがすべらないように車まで雪かきをしてくださり、またわたしの手を取り車に乗せてくれました。そして、オペラの会長さんに会いお礼を言いました。彼はとても喜び、また手伝ってほしいと言いました。

また設営を手伝ってくれた人にも会い、お礼を言いました。

大雪の中、運転もたいへんなのにご親切な神さま、どうもありがとうございます。

その後しばらく困りごとはなかったで、神さまに電話をかけることが少なくなりました。

ある日神さまから電話があり、どうしてる？ 問題は起きてないのかとたずねられました。

わたしはすぐに、おかげさまでないですよと答えました。すると神さまは少し残念そうな声で、それはよかったと言いました。

わが家に少しずつ、うれしいことが起こりだしました。

春にはしだれ桜がつぼみをたくさんつけています。芝生も生き生きと育ってきました。家族も明るくなり、みんな元気になり出し、わたしも少し安心して自分のことができます。

しかしまた困りごとが発生です。ガレージのシャッターが開きません。車が出せずに困りました。

久しぶりに神さまに電話をかけました。神さまは何か困りごとが起きたのかと喜んで答えました。

すぐに来てもらい、直してもらいました。神さまは何でも直してくれます。

それからまた、郵便箱がこわされたので、神さまに電話をかけ、新しい物を買ってもらい、取りつけてもらいました。

そのとき神さまが取りつける台も直したほうがいいと言って、その材料を買って自分の家でペンキ塗りをしてから持ってきました。底にセメントを入れて柱を立て、次の日に来てみんな完成

させました。わたしは材料費を出しただけです。それに必要な道具類はすべて神さまが持ってきてくれます。

わたしは楽チンをしています。こんなにあまえていいのかと思うときがあります。

神さまが喜んで手伝ってくれるので、わたしも神さまに負けないように喜んであまえることにしました。

1年以上も立て続けに困りごとが続きましたが、春が過ぎて暑い夏に入ったころは、もう困りごとはめっきりなくなりました。神さまも退屈なので他の困った方のお世話をするようになりました。

そして時が流れ、神さまは年を取り、あまり人のお手伝いができなくなりました。

わたしはもう大丈夫なのです。わたしには喜びごとが増えてきました。以前の困りごとはうそのようです。

今はわたしを守ってくれる方が現れたのです。わたしはその方のことを白馬の騎士さまと呼んでいます。

彼はとても頼りがいのある方です。わたしの困りごとをすぐに感知してくれて、対応してくれます。

特にさみしいとき、暖かく満たしてくれます。

困りごとのときは、アイデアをくれます。夢を持つことを教えてくれます。

そんな彼をわたしは好きになり、愛するようになりました。

それを彼に伝えました。すると彼もわたしを愛していると言ってくれました。

愛する人がいて 愛される人がいるなんて、何とすてきなんでしょう！

ささいなことでも喜べる。何ごとにも感謝することができる。なんて幸せな毎日でしょう。

心を支え合いながら毎日を楽しく暮らしているので、将来二人が結婚するしないは関係ないのです。

同じことに共感できる方がそばにいてくれるだけで幸せなのです。

今最高に幸せです。この幸せを万の神さまが最後にわたしに届けてくれたんですね。

あー神さま、どうもありがとうございます。幸せになります。

愛していると言ってくれるあなたの声が聞こえる。

愛してますとあなたに言える。

あなたのおいがわかるわ。

あなたの手にさわることができるわ。

あなたとおいしく味わうことができるわ。

できることがまだたくさんあるわ。
だから目が見えにくくとも幸せです。

もしまったく見えなくなっても、こわくはありません。
あなたのやさしい声を頼りに動きまわるわ。
あなたの頼もしい手に引かれて歩くわ。
あなたのすべての愛がわたしの目の代わりになってくれるわ。
今よりももっと幸せが見えてきたわ。



白馬の騎士さまと天女さま

ある星に白馬の騎士さまというとても頼りがいのある男性が住み、その星の反対側には天女さまというそれはそれは美しい女性が住んでいます。

ある日、白馬の騎士さまが狩りにいくため星から星へと獲物をさがしにとびまわっていました。

美しい天女さまも羽衣をヒラヒラとさせながら花をつみに星から星へととびまわっていました。

ある星で白馬の騎士さまは獲物を見つけ、弓矢をはなとうとしたとき、天女さまも羽衣をヒラヒラとかれんにゆらしながら、花のたくさん咲いている同じ星に降りてきました。

白馬の騎士さまは獲物を見つめていましたが、目の横から羽衣の美しい透き通った布のような柔らかいものがほおをかすめていくので、ふと見ると、その柔らかいものの先には何と表現していいのかわからないほどの美しい女性が立っていました。

白馬の騎士さまは弓矢をはなつ手を止め、その美しい女性を見入っていました。

それに気がついた天女さまは恥ずかしくて、羽衣で顔をかくし後ろを向きました。

そこで白馬の騎士さまがたずねました。

美しいあなたさまはどなたさまで、どこの星から来たのですか？

天女さまは恥ずかしそうに答えました。

ここから1億光年先の星です、とさわやかな声で答えました。

天女さまも白馬の騎士さまにたずねました。

勇ましいあなたさまはどちらのお星から来られたんですか？

ぼくはここから2億光年先の星さ。

それを聞いた天女さまが、あら、わたしの星から近いわ、えーと白馬さま、そんな近いところにこんな美しい方がいたなんて信じられない。でも今知ってよかったわ。

そこで白馬の騎士さまは、すぐに天女さまを見つめながら言いました。

ぼくはあなたと光通信をしたいのですがよろしいですか？

天女さまが少し考えて答えました。

わたしの父上がとてもきびしい人なので、光通信はまだ教えてもらってないんです。

それを聞いた白馬の騎士さまがすぐ、ぼくが教えてさしあげますよと言いました。

それを聞いた天女さまは、うれしそうに笑みを浮かべ、お願いするわ。

そして二人は50年後に会う約束をして別れました。

そして50年後、二人はまた同じ星で会いました。

天女さまは50年前と少しも変わらず また、白馬の騎士さまも男ぶりは変わりません。二人と

も手を取り合い言い合いました。

会いたかったわ。

まるで昨日のようですね、と顔を近づけてささやきました。

そして白馬の騎士さまは、光通信のやり方をていねいに教えました。

天女さまは頭がいいのですぐ覚えました。

ずっと一緒にいたい二人でしたが、白馬の騎士さまに光のサインがきました。

緊急事態発生とのことで、すぐに自分の星に戻らなくてはなりません。

二人は別れを惜しんで光通信をする約束をして、それぞれの星へと消えていきました。

ある夕暮れどきに、白馬の騎士さまから天女さまへピンク色の光が届けられました。

その色を見た天女さまも、白馬の騎士さまへ二つピンク色の光を送り返しました。

二人の楽しい会話は、いろいろな色の光で伝えられていきました。

そして、お互いの思いを伝えていくうちに二人は愛しあっていることに気がつきました。

二人は高ぶる思いをおさえきれず、初めて出会ったあの星で会うことにしました。

日時は今から3万年後のピンク色と青色の二つの色が重なった色合いの時としました。

白馬の騎士さまもすぐに出かける準備を始めました。

持っていくものは色をつくる光の粉。

そして天女さまに渡す長い恋文です。

それを髪の毛に編み込みました。

そして、天女さまと会うあの星を目がけて家を出ました。

白馬の騎士さまは自分が大きくなるまでの星を通り過ぎながら行きました。

この星はぼくが5歳のとき、父親に連れられて狩りをした思い出のある星だ。

また少し飛んでいくと、7歳のときに、母親からもっと勉強をしたほうが将来出会う女性を幸せにできるよとやさしく言ってもらった思い出の星がありました。

そのころ、天女さまも、愛しい白馬の騎士さまにお会いできる喜びをからだじゅうに表しながら、旅の準備です。

彼女はすてきな羽衣を何枚も持っていくことにしました。

この日のために毎日織っていたのです。

天女さまも長い長い恋文を美しい長い髪の毛に編み込みました。

そして、愛しい白馬の騎士さまとの出会いの星を目がけて家を出ようとしていました。

しかし、その様子を見ていたきびしい父親が声をかけました。

おい天女、どこへいく気だと言いました。

天女さまは親に黙って行くつもりでしたのでびっくりしました。

言っても許してくれないとわかっていたからです。

そこで天女さまはあわてて、今から羽衣のつくり方を教わりにいくのですよ、お父上さまと答えました。

父親が続けて聞きました。

ならばその包みを見せてみな。羽衣が入っているはずじゃと。

包みを見せました。もちろん包みには羽衣がちゃんと何枚もきれいにたたんでありました。

それを見た父親は、そうか、ならば気をつけて行ってこいと言いました。

天女さまはほっとして、すぐに家を後にしました。

天女さまは時間に間に合わないと思い、思い出の星をゆっくりながめている余裕がありませんでした。

でも一つの星に目がいききました。その星は天女さまが3歳くらいのときの思い出の星でした。

あーなつかしいわー。

母上さまがわたしと2歳年下の弟を風呂上がりに両脇に抱えて歩いたころのなつかしい思い出の星でした。

そうこうしているうちに、待ち合わせの時間のピンク色と青色が重なるころに近づいています。

。

天女さまは急いであの星をめがけて、羽衣をゆらゆらと揺らしました。

そしてあの星に着きました。

すぐに愛しい白馬の騎士さまはどこだろうとさがしました。

するときれいな笛の音色が聞こえてきました。

天女さまはその音色にひかれて行ってみたら、白馬の騎士さまは大きな石の上に座り横笛を吹いていました。

天女さまはすぐその美しい音色に合わせて羽衣をヒラヒラとなびかせ踊り出しました。

二人とも息はぴったりです。

初めてだとは思えないほどの息の合いようです。

それを隣の星から眺めていた縁結びの神さまがやってきました。

そうして二人に言いました。

見事な笛吹きと美しい踊りだ。

わしがそちらを結びつけてやるわいなと、笑いながら結びの儀の準備をするように家臣に申しつけました。

白馬の騎士さまも天女さまも何が何やらわかりませんでしたが、二人ともうれしきで手と手を

取りあいました。

そして、結びの儀式が始まりました。

まず天女さまの仲間の踊りです。

それはこの喜びの日を忘れず末永く幸せになるという踊りでした。

白馬の騎士さまと天女さまはその踊りを見ながら幸せになることを誓いました。

そして、次に子宝に恵まれる神さまがいらして、すばらしい祝詞を読み上げました。

続いてこの星々の銀河系がこわれることなくいつまでも続くように女神さまがお祝いにきてくれました。

美しくて頭がよくてとても教えることの好きな女神さまに来ていただけたら何にも心配することはありません。

儀式の最後におたがいが書いてきた長い恋文を読み上げました。

二人の相手を思う心、したう心、愛おしむ心がそれはそれはたくさんつづられていました。

それを聞いているだけでも幸せを感じることができました。

神々さまも微笑みながら二人の幸せを祝福してくれました。

こうしてめでたく二人の結びの儀式は終わり、神さまたちが用意してくれた星へ旅立ちました。

。

二人は住んでいる星がいつまでも美しい環境を保てるように、いろいろと工夫をこらしました。

。

物を使い捨てせず、大事に使う。

余分なものを買わない。

天然の素材を活かす。

食べ物は捨てないなど、気をつけながら生活をしました。

そして、たくさんのこどもに恵まれ、そのこどもたちの教育に力を入れました。とくに、幸せ感についてはとても熱心に教えました。

目が見えること、話ができること、耳が聞こえること、においがかげること、食べ物を食べてもおいしいと感じる味覚、そして触って味わう感触、普通に歩ける、またおいしい空気が吸えるなど、当たり前のことのすばらしさを毎日教えました。

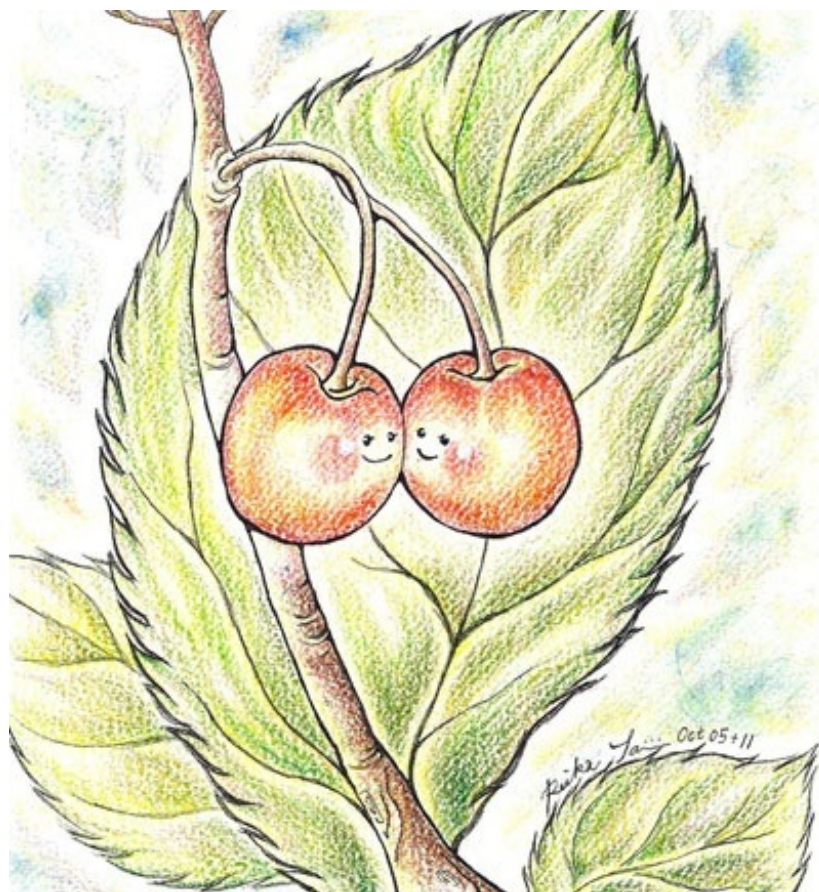
こどもたちも大きくなり、またこのすばらしい教えを自分たちのこどもたちへ教えていきました。

そして何世代も生まれ変わったときには、自分のことをなげいたり、人のことをうらやんだり、けなしたり、文句を言ったりする人はだれもいなくなりました。

すべてのものに感謝をして暮らせる幸せ者だけが住む星となりました。

これが、神々さまが望んでおられる「みろくの世」です。

おしまい。



蚊さまと呼ばせて！

わたしはつらいことがあると庭に出ます。
そして、草むしりをします。
草木の手入れをします。
すると、だんだん気持ちが落ちつき、楽になります
そして、家の中へ戻って、またがんばります。

ある夕方、またつらくなり、庭に出ました。
蚊がたくさんいるので 虫除けのスプレーをしました。
いつものように、草木の手入れをしていました。
そこへわたしの周りに蚊がブンブンと飛びまわり、じゃまをします。

わたしは手で払いながら続けました。
しかし、蚊はしつこくしつこくつきまといました。

とうとう蚊に刺されました。虫除けスプレーのかかってない足首です。
とても痛く、かゆくてたまりませんでした。

そのとき、気がつきました。
こんな小さな蚊さえも、子孫を残すために、手で払われても払われても、働き続ける、がんばり続ける。
この健気な努力を知り、わたしも負けずにがんばらなくてはと思ったら、涙がどんどんこぼれました。

それから、わたしは蚊さまと呼ぶことにしました。
つらいときは蚊さまに刺され、その痛み、かゆみで力をいただきました。
喜んで蚊さまに輸血をしたいと思います。

蚊さま、大きな力をありがとう！

桜さん、あなたは私のお手本です

春になるとわが家のしだれ桜が咲きます。

寒い冬が過ぎて、早く桜が咲いてほしいなーと待っていました。

桜さん、暖かくなりましたよ、あなたの好きな春ですよー、と声をかけて枝を揺さぶります。

次第につぼみがふくらみ出しました。わたしも胸を弾ませています。

そして美しい花が一つ、二つと咲き出して、こんにちは！ 今年も会えたわねとごあいさつをしてくれました。

よく冬の寒さに耐えてがんばってくれたわね。あなたはとっても美しいわよと言いながら、桜の枝の中に入り、花と花の間から空を見上げました。

すばらしいながめです。こんな桜の鑑賞は最高です。とても幸せです。

ね！ ね！ 桜さん、あなたにお願いがあるのよ。

とっても美しいから少し取って押し花にしていいかしら？

あなたの美しい姿をずっと残しておきたいのよ。いいでしょう？

すると、いいわよ！ 少しならねと枝を揺らして答えてくれました。

ありがとう！ わたしはかごを持ってきて、きれいだ！ 美しい！と言いながらつみ取り、押し花にしました。

そして、できあがった押し花を咲いていたときのように紙に貼りつけました。まるっきり同じではありませんが、美しさは十分に留まっています。

花の時期が終わり、葉桜になりました。そして暑い夏です。

暑い日差しに葉はしおれてまで耐えています。

夕方にお水をたくさん飲ませてあげました。

桜さん、がんばってね。この夏を乗り越えたら涼しい秋が来ますからね。一緒にがんばりましょうね。

わたしもあなたに負けないようにがんばるわ。あなたはわたしのお手本ですもの。

夏の暑さに耐え、冬の寒さに耐え、そして春に美しい花を咲かせているもの。

すばらしいわよ。

わたしもつらいこと、悲しいことを乗り越えて、小さなことでも喜び、そして感謝をして、毎日を楽しめるように工夫をこらすわ。そして幸せな毎日を送るわね。

そしたらあなたみたいな美しい人生の花を咲かせるわね。

ありがとう！ 桜さん。あなたはわたしのお手本よ。

和紙と羽衣

わたしは和紙が大好きです。

なぜって？

それは柔らかい手ざわりで、とても気持ちがいいからです。

それに植物からできているから地球環境にもいいのです。

また空気もきれいにしてくれるからからだにいいのです。

植物の名前は、みつまた、こうぞ、がんびの三つです。

日本で育った植物からつくられているから和紙と呼ぶのです。

手透きの和紙はもっと柔らかいです。

こんなにいやされるものを神さまはどうしてつくったのでしょうか？

わたしは毎日のように和紙を使っていろんなものをつくっています。

花のようなくす玉。

風に揺れるイヤリング。

美しい着物、帯、ドレス。

和紙の糸では、編み物のドレス。

すばらしいものをつかむ網。

釣り糸。

着物の帯。

和紙を使ってつくっていると、とてもいやされ、今までのつらいことがうそのようです。

とくに手透きの紙はとても柔らかくて美しい。心をやさしく包んでくれているようで、何だか羽衣のような気がします。

もしかして、和紙は天女さまがつくられたもの？

そうですね、きっと。美しいもの。すばらしいもの。

とても魅力的ですもの。

それからわたしは和紙で作品をつくる時は、お祈りすることにしました。

羽衣の女神さま、この紙を使わせていただき.....を作りたいと思います。

よろしいでしょうか？ とたずねます。

すると、よろしいですよ、と聞こえたような気がします。

ありがとうございます。ていねいに扱わせていただきますと頭を下げたから、つくることになりました。

あるとき、手透きの紙を使い、スカートをつくることにしました。

目寸法で適当に切って接ぎ合わせて、1段、2段と継ぎ足してみました。

それがぴったりです。これは偶然でしょうと思い作業を続け、また3段目もぴったりです。こんなこともあるのだなと思い、続けました。

作業を始めて10時間がたったころ、少し眠たくなりましたが、音楽を聴きながらまだがんばれると思い、続けました。

すると、手はどんどん動き上手にやっています。

止めるどころか、早く仕上げてみたいという気になり、つかれることもなく夢中でやり続けていくので、わたしだけじゃなくだれかが手伝ってくれているような不思議な感じでした。

4段目と5段目はだんだんと継ぎ合わせも多くなりましたが、せっせと手を動かし、ある程度のところでこんな感じと思い、正しいかどうかを接ぎ合わせる前に4段と5段を軽く合わせてみました。4段目が30センチ以上も長かったのです。

切らなくてはと思いましたが、まずは接ぎ合わせてみて、あとであまった部分を切ることにしました。

今までうまくいっていたのに、少し残念だなと思いながら、接ぎ合わせていきました。

すると、なんとさっきは30センチもあまっていたのにぴったりです。これもおかしい夢を見ているようです。

うれしくなり、すその始末をしたらできあがりです。

作業を始めて14時間がたったでしょうか。

手はどんどん折りたたみ、そして送り出す作業です。

すそが広いので、同じ作業を長く続けていきます。

しかし、眠気がしてきました。一瞬頭が後ろにガクツと倒れ、記憶が遠のき音楽も耳にとどかなくなっています。

また頭がガクツと前に倒れたときに、ガサガサという音で目が覚めました。

びっくりです。少し眠っていたんだと気がつきました。

わたしは寝ていたのに、手は休むことなくリズムよく動いていたのです。

ハッとしました。働くという字は人が動くと書きますが、わたしは眠っていたのに動いていた手はだれでしょうか？

しばらくぼーっとしていました。

あー、羽衣の神さまだ！

だから長い時間つかれることなく何でもうまくできたんだね。
神さまもどんなものができあがるか楽しみだったのね。だから手伝ってくれたんですね。

でもすごくうれしいわ。すてきにできあがったもの。
さっそく自分で着てみました。わたしにぴったりです
鏡に映る軽くて美しいスカート。
踊りたくなり、フラッとまわってみました。
可憐でしなやかです。とても気に入りました。
長時間がんばったかいがありました。

あー、羽衣の神さま！ ありがとう。
すてきなものができ、また貴重な体験をさせていただきました。
紙（神）のなす技でした。



絵から白い煙

わたしはある人にお金を貸すことにしました。

とても尊敬できる、商売でもお世話になっている方です。

その方は、なかなかお金を借りることを言い出しきれません。3時間もほかの話をして帰りました。

しばらくたってから電話で依頼してきました。今までお世話になってきたので、貸してあげますよと返事をして、1週間後に取りにきてもらうことにしました。

わたしは仕事が忙しく、自分でお金を出しに行くことができず、人に頼むことにしました。

しかし、一回で現金化することができません。印鑑を落としたとか、今度は何かが足りないとかで、2度も現金化できません。

そのとき、あー、このお金は都合しても役に立たないお金だなあと思いましたが、約束したので貸すことにしました。

そのころ、わたしは油絵を始めていたので、何とかその人が救われ借金地獄から救われますようにと祈りながら絵を描きました。

その絵ができあがり、絵を見つめながら、こんな絵でも人の役に立てばいいのになあとながめていました。すると絵からふあっと白い煙が出てきました。

一瞬でしたが確かに白い煙が出てきました。びっくりしました。

約束の1週間がたち、お金を受け取りにその方が来ました。

そのときに、お金がすぐにできなかったことや、きつとこのお金が役に立たないかもしれないと伝えました。

また、絵を見せました。しかしその方は見ませんでした。

わたしは絵がへたで気にいらなかったのかと思いました。

あとで聞いた話では、チラッと見たそうです。

しかし、その絵があまりにもその通りでこわかったそうです。

その絵には一粒の米さえも大事にする気持ちでがんばってほしいと思い米粒を描いたのでした

。

その人はお金を1週間後に返すと言って帰りました。

そして1週間後、お金と利子を持ってきましたが、必要なら使ってくださいと言い、また上乘せして貸しました。

1か月後、自分の生命保険を解約するから、そのときにお返しすると言い帰りました。

約束の1か月がたってもわたしは催促しませんでした。

困っているのに催促なんかできませんでした。

しかしそのころ、他の方がお金を貸してほしいと言ってきたので、催促してみることにしました。

まず電話をかけました。すると娘さんが電話に出ました。

わたしはいつもお世話になっていますが、お父さんはいらっしゃいますかと言いました。娘さんはあーと大声を出して、お母さんと呼びました。

しばらくして、その方の奥さんが電話に出られて言いました。

いつもお世話になってます。主人は亡くなりましたと落ち着いて答えました。

わたしはバカなので、奥さん、ご主人には死に神がついていたんですよと言ってしまったのです。

その後、わたしはお金を貸してよかったと思いました。もし貸さずに相手の方が亡くなったと聞いたらずーっと悔やんでいたでしょう。いつの日かわたしの子孫にいいことがあればいいわと思いました。

家族のいないときに心臓発作で亡くなったと聞きました。

でも生きようと思えばすぐ薬を飲めば助かったはずです。

しかし、それをしなかったのです。

すぐにお参りさせていただきました。

大きなお屋敷でお酒やビールの空きびんがたくさん積み上げてありました。

その後しばらくして、わたしはお金の催促のために電話をかけました。その奥様はていねいに返すお金がないとただくり返すだけです。

こんな心のない話を聞くためにお金を貸したわけじゃないと思い、とっさにわたしは奥さんに言いました。

奥さん！ 今度またわたしがお金に困り、お金の催促をしたときは、今みたいに上手にお断りしてくださいと泣いて頼みました。

その後電話をかけることもなくきました。

その後20年過ぎたとき、わたしが商売でお世話になっている、とても親切でいつでもありがたさを感じる方が、お金を貸した方と同じ出身地であると気づき、あーこんなことでお返しが返ってきたと思い喜びました。

これは気持ちよく貸し、最後まで気持ちよくいたおかげだと思いました。

忘れずにお返ししていただき、ありがとうございます。
十分に返していただきました。今は楽になりましたか？

ごはんがおいしい

今日は娘と食料を買いにベトナムの店に行きました。

野菜とお米などを買いました。

レジ係の若い女の子は少し眠そうです。

お金を払い家に帰ってきました。

レシートを見たらお米代が入っていません。

今度また行くときに払えばいいわ。

毎日お米を炊き食べました。

しかし、おいしくありません。

お米代を払ってないからだわ。

店に行き、オーナーに説明して払いました。

オーナーはたいへん喜んで“Thank you!”と何度も言ってくれました。

物を買ったのですから払うのは当然です。

払った後はごはんがおいしくなりました。

ごちそうさまでした。

わが家のイチロウくん

わが家には猫ちゃんが4匹います。
みんな個性があります。

ある12月の寒い冬。
わが家の三男のイチロウくんが、夜に出て行ったきり帰ってきません。
とても寒い冬のことです。
心配です。
朝になっても帰ってきません。

昨夜彼が家を出た後、車が急いで走り去っていきました。
また裏庭のほうで動物の大きな騒ぐ声が聞こえました。
もしかして野良犬に襲われたのかしら。

こんなことは初めてです。
夏の暖かいときはちゃんと朝には帰っていました。

裏庭をさがしに行きました。
いません。
家族もさがしました。見つかりません。
わたしは泣き出しました。

先日イチロウくんに話を聞いてもらいました。
ねえ、イチロウくん、わたし、昨年より見えにくくなってきたわ。
裏庭にたくさん落ちているアメリカ紅葉の種が見えにくいもの。

イチロウくんはわたしの顔をじっと見つめて聞いてくれていました。
あー彼はわたしの不幸を持っていったのかしら。
野犬に襲われたのかしらと思うと、大声を出して泣きました。

次の日もさがしまわりました。いません。
わたしも家族も彼の思い出を話し泣きました。

彼がわたしの目がよくなるために身代わりになったと思うと、泣けて泣けて。
もし襲われたなら、そばにその形跡が残っているはずだと思い、見まわりました。
何にも見つかりません。

わたしはだんなさまを亡くして1年あまり。こんなに泣いたかしら。
今まで30年あまり、つらくても悲しくても、あまり泣かずにがんばってきました。
今泣いているのは、今まで泣きたくっても泣けなかったせいでしょうか。
お母さんが泣いて悲しんでいるので、こどもたちがやさしくしてくれます。

みんながよいように変わっていきました。
わたしが泣いて変わるのなら、何で今まで泣かなかったのかと。
泣いてこんなに楽になるのなら、早く泣けばよかったわ。

あーイチロウくん、どうしているの。
もう天国に行っちゃったの。

彼がいなくなって1週間で過ぎた、クリスマスの夜に夢を見ました。
わたしのベッドのそばの上の軒からひもでつり下げられたかごに、黒猫ちゃんがいました。
かごとゆっくりと揺れています。気持ちよさそうに丸くなって寝ていました。
あー神さまが贈り物をしてくれたんだと思い、玄関に行きました。
イチロウくんの姿はありません。

寒い雪の降っている日に、またみんなで車に乗って近所をさがしにいきました。
窓から大声を出して、イチロウくん、帰っておいで、どこにいるの、おやつだよ？、あなたの好きなツナ入りだよと、声をはりあげてさがしました。
一通り連絡をしてさがしてもらいましたが、いい返事はありません。

また夢を見ました。今度はわが家の真向かいのレンガの家にいるという夢です。
いなくなった夜、車の音に驚き恐ろしくなり、わけもわからず行ったのかしら。
それから望みが出できました。みんなが元気を取り戻しました。
わたしも泣いてはいませんでした。

いつものように、朝5時に目を覚まし、ランプをつけました。
すると小さい声で猫の声が聞こえました。
まさか、そんなはずはないわ。

また小さい声が聞こえました。
あーイチロウくんだーと飛び起き、玄関へ。

ドアを開けました。

そこにやせ細った彼がいました。

わー帰って来たの。イチロウくんが戻ってきたよと大声を出しました。

わたしは思わず大きな声で泣き出しました。

あーよかった。よかった。

家族もみんな起きてきて、本当に帰ってきたのーと泣き出しました。

彼はさっそくエサのところへと走っていきました。

16日ぶりです。

エサを食べてすぐわたしの部屋に来て、わたしにくっついて眠りだしました。

わたしは彼によく帰ってきてくれたねとやさしくなでました。

彼は、今は夢か現実かわからずうなされています。

あーかわいそうに。

まさか元気で戻ってくるとは夢にも思っていませんでした。

神さまは、彼を通してわたしに泣くことを教え、楽にしてくれたんですね。

もしかして、天国のだんなさまが願いをしてくれたのでしょうか？

そう思うと、たまらなくまた泣けてきました。

喜びの涙です。ありがたい。

以前よりイチロウくんが愛おしくなりました。

帰ってきてくれてありがとう！



猫ちゃんたちの助け合い

わが家には猫が4匹います。
わたしは、あまり猫は好きではありませんでした。
しかし、娘たちが子猫を施設から連れてきました。
名前をトミーとつけました。

娘たちは学校へ。だんなさまはお仕事。
猫はわたしと一緒に留守番です。
さびしいのかわたしの後を追いかけてきます。かわいいです
こんなに小さいのにお母さんと離れ離れ。人間と暮らしているのです。
みんなもとてもトミーをかわいがりました。

半年がたったある日。
下の娘が黒猫ちゃんを連れてきました。タマと名づけました。
小さいけれど目つきがすどいです。
小さい子猫ちゃんが来たので、みんなでかわいいとさわいでいました。
そこへトミーが何のさわざなんだとやってきました。
そして、今までのぼくのパラダイスはどこへいったんだと、目を大きく開けて見えています。

そこからトミーのボスとしての役割が始まりました。
まずタマゴロくんがちゃんとおトイレができるかチェックです。
彼の後を追いかけてまわっています。
あー、タマゴロくん、トイレと間違えて飾り用の石ころの上にしてしまいました。
でも、その上に石ころを乗せてありました。
そこでトイレはここですよと娘が教えました。

次の日、タマゴロくんはそこでしていました。
それをトミー親分が階段のかけから見えています。
そして、砂をかけてあるかチェックです。少し足りないようです。
彼がかけ直しました。
トミーは男なのにお母さんのようです。偉いと思いました。

二匹がだんだんと慣れてきた半年後、また黒猫の赤ちゃんが来ました。イチロウくんと言いました。

上の二匹はすっかり大きくなりおとなです。
小さいイチロウくんがお母さん恋しさに泣いています。

眠たくてぐずっています。

トミーは困ってしまいました。仕方がないので彼がお母さん役をすることになりました。イチロウくんを自分の子のように抱きかかえるように寝ています。それを見ているととてもいやされます。わたしも見習わなくてはと思いました。

ときどきトミーはつかれるのかお母さん役をタマゴロくんと交代です。タマゴロくんは毛の長い猫です。気は荒く、ときどきかまれます。その彼がロッキングチェアでイチロウくんを抱き寝かしつけています。思わず写真を撮りました。なんとすばらしい光景でしょう。また感激で涙が出ました。

その後、タマゴロくんがそっとロッキングチェアを揺らさず降りてきました。なんとつかれたのか長い毛は汗で湿った感じです。しっぽはいつもピンと立っているのにたれさがっています。どうも、おつかれさまです。

小さいイチロウくんはお兄ちゃんたちを追いかけて遊んでいます。まるでトム&ジェリーのようです。

それから3年がたつと、イチロウくんはタマゴロくんにいじわるをするようになりました。あんなにかわいがってもらったのに、その恩を忘れています。なぜ？それはわたしが悪いのです。小さいとき、イチロウくんをあまえさせたのです。だってわたしになつき、よくお話をするからです。にゃーんにゃと猫語で会話ができるのです。

あるとき部屋に、にゃんにゃとわたしをさがしにきました。だんなさまが、とみよはいないよと言うと、にゃんと言って出ていきます。また夫婦でくつろいでいるとき、にゃーんにゃとききました。だんなさまはイチロウくんに“Tomio is my wife!”と言いました。それほどわたしになついていたのです。だから、イチロウくんは生意気に育ったのです。それでお兄ちゃんたちをいじめめるのです。よくけんかをするので、3匹は多すぎたのかと考えていました。

それから時はたち、トミー親分は7歳、タマゴロくんは6歳、イチロウくんは5歳になりました。
またもや子猫ちゃんがやってきました。ミュータと名づけました。
久々の小さい猫ちゃん。みんなは喜びかわいがりしました。
しかし、ミュータもお母さんが恋しくて泣きます。ぐずります。
あまり年がはなれているのか、トミーもタマゴロくんも子育てをしようとしません。
困ったイチロウくんが子守り役をするようになりました。

いつもイチロウくんとミュータは一緒に遊んでいます。
そしてミュータはイチロウくんのことをしたうようになりました。
イチロウくんがトミーやタマゴロくんとけんかをすると、すぐにやってきて、相手をパッチン
とたたくのです。

それからミュータはジャッジの仕事をするようになりました。
ときどき判断ミスをします。
猫ちゃんが3匹から4匹に増えてから、けんかがなくなりました。

あるとき、イチロウくんが家出をしました。
みんなでさがしました。
わたしは悲しみ、泣いてばかりいました。
するとミュータがわたしのそばにいるようになり、なぐさめてくれました。

16日ぶりにイチロウくんがやせ細って帰ってきました。
みんなで泣き喜びました。
しかし、他の猫さんたちは変わりをはてたイチロウくんをほかの猫と思い近寄りません。
また、イチロウくんも今は夢なのか現実なのかとうなされています。

それから3日たったころに、やっとみんなイチロウくんとわかり近づいてきました。
それにミュータもお兄ちゃんと遊ぼうとします。
わたしはミュータをなでようと思いました。
するとミュータはイチロウくんに気づかって避けるのです。
そして、わたしに背を向けます。
わたしはびっくりしました。人間の勝手に猫をかわいがっていることに気づきました。
猫にしてみれば猫世界のルールがあるのです。
それを知らされました。

猫さまたちにはいろいろと教えていただきました。いやされました。
人間にはできないいやしをもっています。

わたしたち人間は、猫たちや動物たちの役に立つことをしているでしょうか。
考えさせられました。
いつまでも動物たちと仲よく暮らしていきたいですね。
また、その環境を守っていかなくてははいけませんね。



今度はうまく生き延びてね

わが家には猫が4匹います。

かわいいです。面白いです。楽しいです。

ときどき、お礼にプレゼントを持ってきます。

春に生まれたばかりのウサギの赤ちゃん、ハトの赤ちゃんをくわえてきます。すぐに外の親のところへ返してあげます。

しかし、すでに手遅れのときがあります。

猫をおこることなく、ありがとう、必死に捕まえてきたのねとほめてやります。

裏庭にうめることも考えました。

結局川の魚にささげることにしました。

せっかくこの世に生まれて、運悪く短命になったのだから成仏させたいです。

白い紙に包み、大事に手と手を合わせながら、今度はうまいこと猫や他の動物から逃げて大きくなるのよ、また会いましょうね、と語りながら川に投げ入れます。

また、手と手を合わせて、天国へ行くのよとお祈りをします。

自然のサイクルといえ、毎回はかない命について考えさせられます。

わたしたち人間の命はどうなのでしょう。

いただいたこの命を大切にしているでしょうか。

無理をして縮めてはいないでしょうか。

粗末にしていないでしょうか。

はかなさを伸ばす努力をしているでしょうか。

あきらめてはいないでしょうか。

わたしは無理をすることがありませんが、112歳を目指しております。

もし猫になったらお願いね！

わが家のかわいい猫ちゃんへ。

もしわたしとあなたが入れ替わって生まれ変わったときは、あなたのひぎにすわらせてね。

朝ですよ！ と右肩をもませてね。

洗面所の水道を少しひねってあなたの手のひらから水を飲ませてね。

ときどきお尻をペンペンとたたいてね。とても気持ちが落ち着くからね。

ハトも追いかけていわ。ウサギさんもね。だからお外へ出してね。

おとなりの猫さまも気になるわ。そっと出してね。

感謝祭のころは獲物をくわえてくるからおどろかないでね。

わたしはとても食いしん坊なので、ないしょでお刺身をちょうだいね。わさびなしでね。

鳥のからあげも好きだわ。においだけじゃ嫌だよ。

たまにあなたの足もとにまわりだしたら、忙しくてもあやすふりでもしてね。

ニャ?ンと鳴いたときは、お願いごとがあるから聞いてね。

その代わりに、あなたのそばにいてあげるわ。

寝るときもあなたの足もとで寝て、ときどき首と肩の間に顔をつけるわね

もし悲しいときはわたしをなでながら泣いていいわよ。

文句もぐちも聞いてあげるわ。耳に栓をしておくね。

もしものために、今あなたをかわいがるわね。

あなた、とてもよい猫ちゃんよ。

わたしと会話ができるもの。わたしのお世話をしているもの。偉いわ。

わたしに猫がつとまるかしら。今からあなたを見習うわね。

どんどんしつけてね。学ばせていただくわ。よろしくね！

アライグマとアイスストーム

冬が過ぎ暖かい春が来たころ、娘が二階でピアノを弾いていました。すると暖炉から鳥の声が聞こえてくると言い、弾くのを止めました。わたしはそんなことはないと言っていると暖炉をのぞいて見ました。鳥などいません。

しばらくすると確かに鳥のような鳴き声が聞こえました。また暖炉の中をのぞき、上を見ました。何やら動いています。すぐにだんなさまにのぞいてもらいました。彼は“Oh, my God”と言いました。

なあに？
アライグマの赤ちゃんたちだよと驚いて答えました。

これはたいへんだ。アライグマは危険です。すぐ動物を捕まえてくれる業者へ連絡しました。アライグマのお母さんとお父さんをつかまえてから、赤ちゃんを取り出すことにしました。そして、屋根の煙突の周りに仕掛けのかごを置き、おびき寄せのエサも入れました。

2日後、お母さんグマとお父さんグマがかごに入っていました。そして赤ちゃんグマたちを暖炉の中から取り出しました。6匹いました。とてもかわいいです。みんな森に返してあげました。

アライグマのお母さんとお父さんは知っていたのです。わが家の煙突から冬になっても煙が出ていないことを知っていたのですね。

あとは暖炉の掃除を煙突から入ってしなくてははいけません。わたしたちではできませんので煙突掃除の専門屋さんにしてもらいました。その人が、煙突の中は長い間すす取りをしていませんね。火事の恐れがありましたよ、と教えてくれました。
え？、そうだったんですかと、だんなさまは驚きながらお金を払いました。

予定外の出費をしたなあと思いながら、夏が過ぎ寒い冬がやってきました。寒いときはガストーブをつけます。しかし 天気予報では今日はアイスストームになると言っています。わたしは経験したことがなく、へーと思いました。

そして、家族でガラス越しに外を見ながら昼ごはんを食べていました。
すると、みぞれが降り出し、あっという間に草木がクリスタルのようにになりました。
あー、きれいだなあ、美しいと言って写真を撮ったりしていました。

やがて草木は氷の重みでたれ出し、電線にも大きな枝が倒れています。
初めての光景にみんなただただ見入っていました。
しばらくして 電気が消えました。ガスストーブも止まりました。
すぐに電気もガスもつくだろうと思いました。
しかし何時間たってもつきません。
そこでラジオをつけて聴きました。
すると町全体が停電しており、復旧に1週間かかると言っています。
これはたいへんだー。まきを買に行きました。
みんなもまきや電池、ろうソクや食料を買いにきていました。
あっという間にまきは売り切れです。

暖炉にまきを入れ、赤々と燃える炎に包まれてホッとしました。
夜になり、ろうソクに火をつけ部屋ごとに置きました。
暗い中、暖炉のそばで寝ました。

暖炉のない家はたいへんです。中にはホテルに泊まったり、親戚や友だちのところへ避難したりする人もいました。

わが家は大丈夫です。暖かい暖炉に火がついています。
あー、と思いました。
毎日暖炉に火をつけている。
もし煙突の掃除をしていなければ、火事のおそれがあったんだー。
アライグマさんたちのおかげだ。
大きな出費はしましたが、助けてくださったんですね。

そう思うとアライグマちゃんたちが愛おしくなりました。
今どうしているのかな？

それから8日がたった夜に、突然電気がつき、家中が明るくなりました。
わ?い! 大声を出して外を見ました。
あれー。近所はまだ暗いままで。

わたしはとっさにわが家の電気を消しました。
みんなに申しわけないからです。かわいそうだからです。

みんなが困っていることを知っているからです。

次の日、やっと近所も明かりがともりました。

やっとみんな安心して暮らせます。

いつも電気がついていたことに感謝しました。

普段の生活で使っている電気、ガス、水道水が止まり、困ってみてはじめていかに普段恵まれていたかがわかりました。

不自由なく使っていたことに感謝を覚えるとともに、大事に使わなくてはと思いました。

また、もっと大事に使わなくてはいけない。

そして、与えてもらうだけではなく、わたしたちもありがたく使わせてもらわないといけない

。

普段の恵みに感謝を覚えた冬でした。ありがとう！



夜の運動会

夜になると、わが家の猫とリス、ポッサム、ダクーンが裏庭で運動会をしています。
今夜はかけっこです。

一番になったら、飼い猫と入れ替わり、家の中に入ることができるルールのようにです。

飼い猫以外はえさがもらえません。自分でさがさなくてははいけません。

最近自然がこわされ、食料が減りました。

そこで野生のお友だちが、飼い猫に持ちかけたお遊びです。

飼い猫は外のきびしさを知りませんので遊びに参加しました。

もちろん、野生の動物のダクーンが一番です。

ダクーンはもうすぐ赤ん坊が生まれるので、お父さんダクーンががんばりました。

飼い猫の代わりにダクーンが家の中に入ってきました。

そして家の人にあいさつをしました。

すみません。今日お世話になるダクーンパパです。よろしくねとていねいにごあいさつをしました。

家の方は、あら、そうなの、いいわよ。でもあなた、家族はどうしたの？ と聞きました。

家内がもうすぐお産なので、申しわけありませんが、食料を少し分けていただけませんか。いただいたらすぐおいとましますと答えました。

家の方は、それはたいへんねと言って、何日分かの食料と小さいオムツとミルクをあげました。

そして、食べ物がなくなったら、また取りに来てねと言いました。

ダクーンパパは涙を流して喜び、お礼を言って家を出て行き、家族のところへ帰りました。

次の日はポッサムがボール転がしに勝ち、ドアをノックしてきました。

そして、ごあいさつをしてくれました。

ぼくはポッサムのポサオと言います。はじめまして！

いいお家ですね。ぼくもこんな家にお父さんとお母さんと住みたいなあ。

ぼくのお父さんはけがをしているので仕事を首になりました。

お母さんはお父さんのぶんも働き、夜遅くにつかれて帰ってきます。

だからぼくは親を助けたいのです。

今夜は力を出して一番になったのです。

少し食べ物と布切れをいただけませんか。

布切れはお母さんにプレゼントしたいです。もうすぐお母さんの誕生日です、とハキハキとお願いました。

それを聞いた家の方は、あら、それは感心ね、どの布がいいかしらと言って、きれいなハン

カチをたくさん出して見せました。

ポッサムのポサオはお母さんの好きそうな物を2枚とりました。

たくさんのお食べ物とハンカチを持って帰って行きました。

家の人は、猫がどうしているか気になりました。

しかし、ゲームに勝たないと家に戻れないのです。

そして、次の夜はリスのリス子ちゃんがやってきました。

リス子ちゃんは女の子の得意な平均台でのダンスがうまく、今夜は1番になったのでした。よかったね。

家に入り、かわいい声であいさつをしました。

家の人は、まあ一なんてかわいい女の子なんでしょうと言いました。

そして、あなたは何が欲しいのと聞きました。

リス子ちゃんはさびしそうな顔をして話し出しました。

わたしのお父さんとお母さん、そして妹も、あの大きな竜巻が来たときにいなくなったの。だからわたし一人ぼっちなの。エーンと泣き出してしまいました。

家の人は、あらー、かわいそうにねと言いながら、もらい泣きをしました。

わかったわ。今日からわたしがあなたのお母さんになってあげるわ、だから泣かないでねと、やさしく言いました。

それを聞いたリス子ちゃんは、うれしくて家の人にとびつき、お母さんと呼びました。

そうしてリス子ちゃんは家に住むことになりました。

次の日、飼い猫が帰ってきて言いました。

ぼくは外で暮らしたのは初めてで、たいへんでした。

外は何も食べ物がない。やわらかいベッドもない。

夜中になるとぼくはおなかがすいて眠れません。

みんなは食べ物の夢を見てムチャクチャと音をたてています。

今までぼくは、いつでもおなかがすいたところにエサをもらっていたので、自分でエサをさがすのは最初楽しい感じでした。しかし、なかなかエサが見つかりません。つかれました。

みんなは必死でさがしています。ぼくが食べないものまでおいしく食べています。

おなかがすいていたのでおすそ分けしてもらい食べました。

こんな変なもの、まずいものを初めて食べました。

ぼくは思いました。恵まれていたんだ。

これからはわがママを言いません。ごはんの時間前におねだりするのをやめます。

ソファで爪とぎをそっとしたりするのをやめます。

ちよっとおこったとき、トイレ以外で済ませることをやめます。

ときどきゴミ箱をあさるのをやめます。

テーブルの上に乗るのをやめます。

話しかけているのに寝たふりするのをやめます。

まだいろいろあるけど、わがままをしません。

野生のお友だちに恥ずかしくて、猫の顔を見せられません。

お利口に猫をかぶっています。

だから、この家にまた住まわせてください。お願いしますと真剣な顔で言いました。

それを聞いた家の人と言いました。

わかったわ、これからはみんなと仲よく暮らすのよ。

他のお友だちのポサオくんやダクーンのパパもみんな家族を連れてわが家の裏庭に住めばいいわ。

食料の足りないときは分けてあげるね。



お日さま

夏はお日さまもたいへんですね。汗をかいています。
昔に比べてもっと汗をかいています。かわいそうです
なんでこんなに暑いと文句を言って、ごめんなさい。

しかし、感謝しています。
暑いと、つい「暑い！」と声が出ます。だから元気が出ます
水が気持ちいいです。
お湯を使わなくても台所の洗い物ができます。
お風呂もすぐ沸いてくれます。
お洗濯ものがすぐ乾きます。
消毒をしてくれます。
料理もしてくれます。
白菜を干すと最高においしいです
にんじんさん、大根さん、キャベツさんもおいしくしてくれます。
お日さまは何でもできるのね。頼もしいわ。

わかったこと

人生。つらいから、楽しさに深みが出る。

人生。苦しいことがあるから、喜びが大きい。

背骨。前は幸福で、後は苦勞。ともに歩むしかない。

大雪。積もるからありがたい。すぐとけたら洪水となり困る。

子供。問題があるから親はがんばれる。うまくいけばもっとがんばれる。

苦勞。すれば人の気持ちがわかる。情が育つ。

貧乏。して育つと夢を持ってがんばれる。しない人は豊かでも貧乏だと思ふ。

贅沢。して育つと文句を言う。してない人はありがたさを言う。

健康。あると何でもできる、やる気があれば。ない人は早く元気になりたいと努力する。

病気。すれば健康のありがたみがわかる。

文句。言える人は余裕がまだある。言えない人はこれでいいんだと悟るしかない。

日本。生まれてよかった。すばらしい国。

日本。遠い国だと思えば恋しい。

電話。スカイプ、Eメールだとすぐ近くでありがたい。

故郷。思い出を育てた畑。今でも心を育てられている。

料理。気苦勞だごちそうでもまずい。解決すればみそ汁だけでもごちそう。

困難。できるだけ取り組めばいい。できないものは非難だけだ。

愛情。あらがたくもらい、ありがたさをあげる。

初恋。愛しさを知ること。教わること。

恋愛。引いたり押したりして保つこと。

結婚。縁のもの。小さな経営団。

離婚。縁のもの。お互いのため、みんなのため。

死別。縁のもの。大きな宿題をもらうこと。

不幸。他人が思うだけ。本人は気づくひまがない。

人生。幸せと思えば人よりも幸せである。

あせっていませんか

どうやらわたしはあせっているようです。

なぜなら、とてもセツカチなのです。

やりたいことはすぐにやり、すませます。

まず、今日は何をするか考え、しなければいけないことをまずすませます。

そして、やりたいことをします。

しかし、庭に出て草木に水をやっていて、あ一枝が伸びていると思うと、すぐにせんていバサミでチョッキンと整えます。

ちょっと枯れた株があると、別のところから移し植え替えます。

ある日、和紙の着物をつくりたいと思い立ち、千代紙の大きいサイズを日本へ注文しました。

送られてきた和紙をさっそく裁断して、実寸で作り出しました。

初めてなので、自分の着物を計り、照らし合わせながら、また紙のサイズをうまく取り入れて、せつせと折り、切って、はりつけて、1日目6時間、2日目7時間、3日目はもうすぐ仕上がりでも8時間かかりました。

夜の10時を過ぎていました。うれしくなり自分で着てみました。

でも長時間床にすわってつくっていたので、腰が曲がり痛くなりました。

これで満足できず、今度は霧吹きを試してみました。

そして、また3日間かけて仕上げました。

根をつめ過ぎて、また腰を痛め、手ははれ、肩がこりましたが、楽しいです。

もっと本物の着物に近づけたいと、せつせともみ、柔らかくして、また同じように3日間かけて仕上げました。

4着目ができて、少し満足です。

でもどうせなら長じゅばんもつくりたいと思い、寸法を計りました。

和紙が足りません。すぐ注文をして、待っている間、2分の1サイズでつくってみることにしました。

半分のサイズなのですぐできあがりしました。

でもこの作業だけをしているわけにはいきません。

家の掃除、料理、庭仕事と、夏の時期はとくにやることだらけです

これら仕事をしながら、好きな着物づくり。

楽しいので、手の痛みなど忘れて、長時間、きりのいいところまでやってしまいます。

できあがりを見たいとせつせとつくりま

仕上がった2分の1サイズ、とてもかわいくてたまりません。

それをながめていて、あ一手が痛いと思いながらも、次は4分の1サイズでつくってみようと、また取りかかります。

そのころ、手の痛みが肩にきて、首にきて、頭にまできて息苦しくなりました。

そこでちょっとやり過ぎ、無理をし過ぎたと、手をいたわり、薬をとり、シップをはります。

何でそんなに急ぐのか。

実は目が見えるうちにやりとげたいと思う気がそうさせるのです。

確かに見えにくいため、時間はかかります。

和紙で着物をつくるのがこんなに楽しいものなら、もっと若く、目がよく見えていたときにやりたかった。

しかし、神さまは長く遠まわりをさせてくれたのです。

いろいろと苦勞をさせて、学ばせて、何が大事で、どうすれば幸せを感じられるのかを教えてくださいました。気づかせていただきました。

今とても幸せを感じながら毎日を送っているのに、何かものたりないのです。

今回、手の痛みとともに気づかせようとしているのでしょうか。

着物も大好きです。

好きな着物を好きな和紙でつくる。

根をつめてやりたくになります。

しかし、からだがつかれていると訴えているのに、無視はいけません。

無理は目にも悪いです。

でも、何か不安があるのでしょうか。

休むことができません。

これは一種のワークホリックなののでしょうか。

いえいえ、わたしのわがままなのです。

わたしには、周りの人、家族に対しての思いやりが欠けていたのです。

見えるうちにとあせるがゆえに、周りの人にまであせりの波を出していたのです。

からだの痛みは家族の心からの訴えだったのです。

人生はあせってははいけません。

あせる気で周りが見えなくなるばかりか、自分自身までだめにするところでした。

間に合ったのです。気づかせていただきました。

痛みに感謝です。

じょうずに目とつき合い、長く楽しく生きていかなくてはいけませんね。

あせらない。

あせってはいけない。

あせってもしかたがない。

うまく乗り越えていかなくてはもったいない。
もったいない！



楽しいことはゆっくりと

わたしはセツカチです。

つらいこともさっさとかたづけます。

しかし、楽しいこともさっさとすまそうとします。

もったいないですね。

せっかく楽しいのですからもっとゆっくり味わって、楽しさをもっと深めていけばいいのに。

セツカチさん、あなたは損していますよ。

せっかくの楽しいものをたくさん落としていますよ。

その落としたものをだれかが拾って楽しめたなら、それは親切な行為ですね。

しかし、だれも拾わなかったら、神さまに申しわけありませんよ。

チャンスを与えていただいたのに、十分に楽しんでいないなんてもったいないですよ。

とされているようです。

わたしは3人の娘を持っており、一人一人の将来を考え、目の不自由なわたしが娘たちの負担になってはいけないと思いながら、楽しいことをしても半減してしまいます。

今、母親をしていること、親をさせてもらっていることは素晴らしいことであると思うと、悩みごとはありがたいもの、自分以外に尽くせること、できることは、素晴らしいことなんだと確信しております。

ならばこの素晴らしいことは楽しいことだと思えば、ゆっくり前に進んでいてもいいのではと思います。

うれしい声は幸せにします

ときどきお友だちや知人が電話をかけてくれます。

元気？ 何しているの？ と声をかけてくれます。

みんなの声は暖かい声です。その心のやさしい声を聞いていると、わたしは幸せ者の主人公みたいにとってもいい気分になります。

わたしの目が不自由でなければ、そんなに気を使わなくてもいいのです。

わたしは運がよいのです。みなさん喜んで電話をかけてくれます。

そして、お手伝いに来てくれます。

みんなの顔が神さまに見えてきます。

わたしの周りは微笑んでいる女神さま、頼もしい男神さまたちばかりです。

だから目が見えにくくても、目の前が暗くうっとうしくても、悲しんだり もがいたりしてはいません。

それより現実を知り、視力範囲が減ってくるなか、見える部分をうまく使い、好きな庭仕事や料理、そして和紙のアートを楽しんでいます。

見えにくいなか、何とかかんを働かせて作業していき、作品ができあがったときは、見えていたときよりも感動は大きいです。だから平等なのです。

世の中うまくできています。

でも、時に困りごとが発生すると、心まで暗くなり、すべてが暗くやみの世界になり、苦しく、やるせなく、つらくなり、こんなやみの世界を生きていくなんていやだーと叫びたくなります。

このような毎日を送るなんてごめんです。

何とかよいことを考え、よいほうを選び、自分の気持ちを高めていきます。

そのためにはまず自分を着飾ります。

家の中でもすてきな格好をして、髪型も歳に関係なく好きな形にします。

そして鏡に映る自分の姿を見てすてきだと言います。

そうすると鏡の中のわたしが微笑みます。

そうするとまた、すてきだ！ とうれしい声が出ます。

その声が出たら最高です。幸せなんです。

そこからメルヘンの世界に入り、すてきな夢を見ながら励むのです。

楽しい音楽を聞きながらお料理をしたり、お掃除をしたり、庭に出て草木とおしゃべりをしたり、気分よく1日を満喫して、今日はすばらしい1日でしたと感謝をして寝ます。

そして、次の日も同じように自分を楽しくつくり上げ、励まして、おだてて生かしております。

毎日が楽しく送れており、友人が電話をかけてきて、あなたはどのようにしてそんなに幸せそうなの

? あなたのうれしそうな声を聞いているだけで、わたしも幸せになるわ! と言ってくれました。

そこで、お友だちにもこの方法を教えました。今とても楽しいそうです。
よかった、よかった!

鏡の中のわたしへ。

あなたはすてきだよ!

ありがとう!

海は広いな美しいな

わたしは南の小さい美しい島で育ちました。

冬でも暖かく海で泳げます。父がこどもたちだけでは海に行ってはいけませんとよく言っていました。

しかし、親は畑仕事で忙しいのです。

ある日の午後に、姉と弟と近所のお友だちと5人で海に行きました。

もちろん親にはないしょです。きれいな海は最高の遊び場なのです。

1時間かけて着いた海は、やはり青くて広くきれいです。

白い砂浜にはきれいな貝がらがたくさんあります。

海の中に入るときれいなサンゴが色とりどりにお日さまの光で輝いています。

熱帯魚が元気に泳いでいます。

サンゴを踏むとグツシャと音を立ててくずれていくので、気持ちよく遊んでいました。

ほかの子たちは、飛び込んだり潜ったりして泳いでいます。

しかし、わたしだけ泳げません。カナヅチなんです。父親ゆずりなんです。

だから足の届く浅いところで泳ぎます。

みんなは楽しそうに泳いでいるので、いいなあとながめていました。

そのうち、みんなは深いところにもぐり、底の砂や貝をとってくる遊びをしています。

わたしも仲間に入れてもらい、最初は浅いところからもぐり、上に上がってきました。

意外にできたので、気をよくして少し深いところで試してみました。大丈夫です。

続けてもぐっていましたが、3度目にもぐって上に上がろうとしたときに、左足がけいれんを起こし動けません。

わたしは海の下へと沈んでいきました。

そのとき上を見ました。

すき通る水の中に太陽の陽が差し、わたしのはき出した息の泡がきれいに光って上へと上がっていくのが見えました。

記憶が遠のいていくときに、わたしの手に竹ざおが触れました。

無意識のうちにそれをつかみ、からだの上に上がっていきました。

みんなが必死に助けてくれたのでした。

わたしはたくさん塩水をはき出し、つかれてしまいました。

もちろんみんなもつかれ、だまって家に帰りました。

夕方になり、何だか知りませんが親に会いたくなり、姉弟と一緒に畑まで迎えに行くことにしました。

途中で親に会いました。そして父がすぐに、何をしでかしたのか？ と聞きました。もちろんおこられました。何でわかったのでしょうか？

いつもは家でおとなしく親の帰りを待っているのに、今日にかぎって迎えにいったのでバレたんですね。

親の言う通り、こどもたちだけで海に行ってはいけません。

運よくわたしは助かりました。

それから何年かたったときに、ある石油タンカーが島の近くで船底を洗い流したのです。

おかげで美しい海の中、海岸は、黒いくさい油の固まりでうめつくされていました。

島の人らはなげきました。

みんなは仕事の合間に黒い固まりを手もからだも真っ黒にしながら取り去る作業を、毎日毎日やり続けました。

文句を言う人はいません。早くきれいな海を取り戻したい気持ちでいっぱいでした。なぜなら自分たちのこどもたちが家族を連れて島に帰ってくるからです。

美しい海、サンゴ礁を見たいがゆえに交通費は高くても島に帰ってくるのです。

それから10年ほどたって、やっと前の海に近づいてきました。

海はまた、泳いだり、貝がらを取ったり、サンゴの間にかくれている貝や魚を取ったりする人たちであふれてきました。

それからまた、この美しい海のサンゴに危機が訪れました。

国の政策による島の土地計画により、雨が降ると赤土がそのまま海に流れ、サンゴ礁がほとんど死んでしまいました。

土地計画は昔からの自然のシステムを無視したものでした。

島には降った雨が流れてろかしていく沼がたくさんありました。

ろかされた水は自然と海に流れるようになっていました。

しかし、すでに流れ込んだ赤土によるサンゴ礁の被害は、見ても痛々しいほどでした。

あの小さいときに見た美しいサンゴはないのです。何年もたたないとサンゴは育たないと知ったのです。

わたしは、サンゴは石の仲間だと思っていたこどものころに、クツで踏みつけてこわしていました。

あの足の感触がよみがえり、悪いことをしていた、申しわけないと思ったときに、おぼれて助けられたことを思い出しました。

おぼれたのは親の言うことを聞かなかった罰だと思っていましたが、もっと理由があったのですね。

わがふるさとの海が早く美しくよみがえることを祈り続けました。

それから何年かたって、なつかしの島に帰りました。

飛行機の窓からながめる海岸線のサンゴ礁が、白い波とともに迎えてくれました。思わず涙が

あふれてきました。

次の日の午後に、家族と海まで歩いていきました。こどものころは遠かった海が近くに感じられました。

海に着いてすぐ海の中に入り、サンゴ礁はどうかのぞきました。

少しサンゴが育っています。

わたしは思わず、あーごめんね、こどものころに踏みつけてこわしてしまっ、痛かったね。ごめんね！ 早く大きく育ってね。また美しい姿を見せてね、と言いました。

いつまでも美しくあると思った海が、一度こわれると元に戻るのに時間がかかる。

これは海だけではなく山や林、そして川にも言えることです。

わたしたちはその自然にいやされ、はぐくまれて育ち、おとなになっても心のよりどころにしていますね。

都市化の時代。使い捨ての時代。普段の生活でわたしたちは自然をこわすことをしていないでしょうか。

地球温暖化とみんなが知っているこの言葉を理解しているでしょうか。

わたしにできる小さなことは、物を大切にいつまでも使うこと、熱をできるだけ出さない工夫をすること、緑化に努めることです。

一人一人ができる小さいことを少しずつやっているうちに、豊かな自然はゆっくりとわたしたちに近づいてくるような気がします。

これをこどもたちや子孫に伝えることが、わたしたちおとなの大事な仕事ですね。

いつでも島を思えばすぐ目の前に現れるわがふるさとや国、そして地球のために祈り努めていきます。

あまえることができれば楽になる

わたしはこの歳になるまであまえることを知りませんでした。

いつもつらいときは、わたしよりつらい人がいるんだから、まだまだよと言い聞かせ、自分のつらさをカモフラージュしていました。

ときには木に話しかけました。

あなたは偉いね、こんな暑い夏にも耐えしのぎ、雨が降れば思い切り水分をたくわえ、また冬の寒さにも耐えしのぎ、雪が降れば雪の重みに耐え、台風が吹けば必死に枝が折れないようにじょうずに揺れしのぎ、二酸化炭素を酸素に変えこの地球を掃除してくれてありがとう！

あなたもあまえていいのよ。

夏が昔より暑くなったとか。

空気が汚くなり過ぎたとか。

木をうまく使って活かしてないとか。

森や林の仲間が減ってきたとか。

もっと言いたいことがあるでしょう！

がまんしないではき出しちゃいなよ。

楽になるからね。

わたしは最近やっと周りの人にあまえることができたのよ。

ちょっとだるいとか。

ちょっとつかれたとか。

ちょっと悲しいとか。

ちょっと泣けるとか。

いろいろと言ってあまえたのよ。

そうしたら、とても楽になったのよ。

そして、楽になったぶんだけ心に広場ができたのね。

その広場には何でもつぎ込むことができるのよ。

楽になったらね、周りの人にもやさしくしてあげられるのよ。

ときどきは心の広場を点検するのよ。

だから木さん、あなたもあまえてね。

そうしないとつらくて、悲しくて、痛くって、つかれてきて、枯れてしまうわよ。

あ、ごめんなさい！ 木さんは言葉が言えなかったのね。

あ、そっか。周りの人が気づいてあげなくてはいけないのね。

枯れてからでは遅いのね、わかったわ！

葉が元気かどうか教えてくれるからよく見るようにするわね。

もし少ししおれ出したらお水をあげて、いたわりの言葉をかけるわね。

あなたに比べたらわたしは口がきけるし、字も書けるわ。

手も動かして訴えることもできるわ。

そうか。わたしはもっと楽になれるんだね。気づかなかったわ。

教えてくれてありがとう。

いつもわたしの話を聞いてくれてありがとう！

動を静にして幸せ

わたしはめったにおこりません。

おこりたいときもあります。

しかし、おこれません。

なぜ？

こわいからです。

何が？

困る人がいるから。

悲しむ人がいるから。

とまどう人がいるから。

わかってもらえないからです。

だからおこりません。

にっこり微笑みます

それを続けていると、おこることを忘れていきます。

いつも笑っています。

何でもうれしくなります。

小さいことでも喜びます。

いやなことでも、よいことだとかんちがいします。

このかんちがいを続けていると、毎日いつでもどこでも幸せと思います。

それを続けていると、うれしいことしか起こりません。

幸せです。

そう思えるようにしていただき、ありがとうございました。

やっときたおだやかな日々

人生なげくことはない。

時期が来れば かならず笑うことができる。

暗く長いトンネルを必死に走っていると、必ず明るい出口が待っている。

実際につらいなかでは考えられないことでした。

あきらめずに無心でがんばってきました。

なげきました。どうしてと思いました

やり直したいと思いました。

元に戻したいと思いました。

でも投げ出さずがんばりました。

今は別にいいことは起きていません。

ただつらいことが減ってきただけです。

すぐに解決できる、それがうれしい。

長い間前に進めず、頭を抱えていたのです。

ささいな喜びがありがたく、とても幸せに思えます。

これも、つらいこと、苦しみをたくさん経験させていただいた後のごほうびだと思えます。

つらいことに対しても、これはいいことの起きる前ぶれだと思える。

そう考えるとつらくなく乗り越えられ、楽になる。

そして幸せを感じるようになる。

毎日そう思って暮らしていると、わたしの人生はなげくことはない、すばらしい人生だと言いつつ切れる。

最高の人生です。

苦勞をたくさん経験していなければ得られない解釈でした。

だから、つらいとき、困ったときは、あせらず落ちついて対処していくとうまいこといき、知らないうちに解決しているようです。

今は腰をすえて立ち向かっており、以前よりおだやかに過ごせています。

よかった。よかった。本当によかった。

あとがき

みなさん、「わが家に来る万の神さま」を読んでいただき、ありがとうございました。どうでしたか？

私は現在、いろいろな難問を抱えています。
しかし、めげるひまがありません。やるべきことがあるからです。

私はまだ見えています。そして歩けます、話せます、聞こえます。
家族がいます。可能性がたくさんあります。
だから、恵まれています。

失われたものを惜しむより、それから得た喜びを生きる力に変え、一瞬、一瞬に幸せを見出しております。

難問は自分との勝負、神さまと勝負だと勝手に決めてます。

今回、文章を書いたことのない私にとっては大きなチャレンジでした。
こうして電子本を出すことができたことを大変に喜ぶとともに、これに関わったすべての方々に深く感謝しております。
ありがとうございました。

わが家に来る万の神さま

<http://p.booklog.jp/book/40881>

著者：たじりとみよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tajiritomiyo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40881>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40881>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.